

メッセージ

- 4 イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」 ゴットホルド・ベック
- 22 老いたら一層あなたの創造者を覚えよ 藤原民雄

6人の証し

- 31 数え切れない主の恵み 松本和子
- 43 主は忍耐をもって導いてくださった 佐久間邦雄
- 53 イエスさまの十字架の愛 佐久間敬子
- 64 よみがえりと光 広田^{よしひろ}慈宏
- 74 暗闇に光を当ててくださる主 広田^{ゆりこ}祐理子
- 84 主に守られ、主に愛され、主と生きるしあわせ 尾崎^{ゆりこ}従子

イエスの救い(4) 進歩への道 「計算すること」 ゴットホルド・ベック

ダビデは詩篇で次のように告白しています。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。
(詩篇 32:1-2)

ヨハネは「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」(1ヨハネ1:7)と書き記しています。

この二つのみことばを読む時、主イエス様の血潮がどれほど尊いものか、しみじみとわかります。私たちは主イエス様の血潮の尊さを、さらによく知り、もっと感謝したいものです。

たちの良心の呵責は消えてなくなります。第三に、私たちが血潮の価値を深く知るならば、悪魔の訴えは、効き目がなくなるということを学んできました。次に、私たちの古い人に対するイエス様の十字架の価値を見ました。

どんなクリスチャンでも、遅かれ早かれ、自分は霊的にもっと成長しなければならないのにそれができない、どうしたらよいのだろうという壁にぶつかります。「勝利の生活」を送りたいけれど、どうしてもできません。自らの内にある罪の性質を、繰り返し知らされるけれど、どうしてもそれから解放されません。

このように私たちは、主イエス様の血潮によって罪赦され、義とされることよりも、さらに進んで聖められることのほうが、どんなに難しいものであるかということを学んできました。

また、救われ、義とされるために、私たちは自分の努力をしなかったのと同様に、聖められるためにも、自分の努力は無駄であるということ学んできました。

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

本日は、ローマ人への手紙6章1-11節を基にして、進歩への道「計算すること」について一緒に考えてみたいと思います。

その本題に入る前に、これまでに学んできたことを少し振り返ってみましょう。

イエス様の流された血潮と十字架の価値

まず、主イエス様の流された血潮の価値について三つのことを学びました。それは第一に、主なる神と人との間を隔てている罪という名の壁は、もうすでに除かれ、人は神との交わりができるようになったことです。第二に、この血潮の価値をよく知るならば、私

ですから、私たちは自らの力で罪を乗り越えようと努力するのではなく、自分たちの罪の源が何であるかを知って、神様が備えてくださった解放の道へと進まなければならぬわけです。

進歩への道 第一段階「知る」と

「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」(ローマ6:6)というみことばが示すように、もうすでに解放の備えは主によって整っています。もし私たちが内面的、霊的にさらに前進したいと思うなら、どうしてもこの事実を知らなければなりません。そこで私たちは「知ること」として三つのことを学びました。

第一番目、知らなければならぬことは何か。それは、私たちが主イエス様とともに十字架につけられた

ことが、歴史的な事実であるということ。第二番目、この歴史的事実をどのようにして知るべきか。それは、単なる知識ではなく、啓示によって知らなければならぬということ。第三番目、なぜこの事実を知ることがそれほど大切なのか。それは、イエス・キリストとともに私たちが十字架につけられたのが歴史的事実であり、それを啓示によって知るなら、私たちの問題の根本までが解決されるからです。以上が前回までに学んだことでした。

では、私たちが憧^{あこが}れてゐる勝利の生活に入るには、どうしたら良いのでしょうか。

進歩への道 第二段階 「計算すること」

これから、今回の本題である第二段階に研究を進めましょう。ローマ人への手紙6章11節に次のように書かれています。

このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きただと、思いなさい。
(ローマ 6・11)

ここに「思いなさい」と書いてありますが、もつと的確に言うなら「認めなさい」「計算しなさい」と表現したほうがよいと思います。これはあなたに対する神様のご命令です。いったい何を命令されているのでしょうか。何を「思いなさい」、「計算しなさい」と言われているのでしょうか。みことばをよく読んでみましょう。実は、ローマ人への手紙6章6節と11節はあわせて読むべき性質のものです。6節、11節にはこう書かれています。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。…このように、あなたがたも、自分は罪

に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。

(ローマ 6・6、11)

知って、そして思いなさい。つまり知ったら、認めて、計算するのが順序として正しいことです。私たちの古い人がキリストとともにすでに、十字架にかかって死んでしまったことを知ったならば、その次にすることは、それを認めて計算することです。この計算も、啓示によって示された神の事実の上に立ってしなければ、何の役にも立ちません。もしそうでないなら、私たちの信仰は根拠のない、むなしなものになってしまいます。もし、啓示によって事実を知るなら、計算するといふのは私たちにとって当然のこととなります。

その1 事実を啓示によって見る

11節は、6節の事実なしには何の役にも立ちません。

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

私たちは、いつも悪魔から攻撃される自分の弱い点をよく知っています。攻撃が始まると、私たちはどうするでしょうか。「私は死んでいる、死んでいるはずだ」と一生懸命、考え始めます。しかし努力して、何とかしようとするほど、古い人が元気づいてくるのに気がつきます。それはどうしてでしょうか。

私たちが、第一段階にまだ足を踏み入れていないからです。主イエス様とともに、もうすでに十字架につけられてしまっているということを、啓示によって「心の目」で見えていないからです。

主イエス様が亡くなられた時、私たちとともに死にました。それは、私たちがイエス様の内に置かれていたからです。確かにイエス様は亡くなられました。それと同じように確かに私たちの古い人も、イエス様とともに死んでしまったのです。あなたは、この事実を啓示によって見たでしょうか。それとただ頭の中で知っているに過ぎないでしょうか。もし、主があなたの目をこの永遠の事実に開いてくださるなら、あなた

はただ、主とともに死んだことを喜び、心から賛美することができるようになるでしょう。

このように、勘定できるようになる秘訣はどこにあるのでしょうか。事実を啓示されることです。次のペテロの例もそのことを教えています。

シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」
(マタイ 16・16～17)

啓示によって、ペテロはイエス様がキリストであると思うようになったのです。

パウロもエペソの信者たちに次のように書きました。

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あ

なたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

(エペソ 1・17～19)

ここでも啓示の御霊が与えられるように、また兄弟姉妹たちの心の目がはっきり見えるように、ということが書き記されています。

私たちが主イエス様とひとつにされたことは、単なる教えではなく事実です。この事実を、啓示によって見る必要があります。これは決して曖昧な出来事ではありません。あるとき私たちは、イエス様が私たちのために死んでくださったという事実を知って、それを心の目で見て、非常に深い体験をしました。いま、私た

ちが「イエス様とともに死んだ」ということを心の目で見るなら、それにも劣らない深い体験をすることになるでしょう。この二つの体験は、私たちの生活の土台となるべきものです。

私たちの古い人は、主とともに十字架につけられたから死んでいるのです。神様が、私たちのためにもうすでに、キリストの内になしてくださったことを見ましたから、それを勘定に入れるのです。これが本当の計算です。今から死のうとして計算するのではなく、もうすでに死んでしまったから、そのことを計算するのです。

その2 啓示された事実を認め、計算すること

「思いなさい」というのは、何を意味しているのでしょうか。それは普通に計算し、会計の帳簿を付けるようなものです。

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

例えば、人間はいろいろな仕事をしますが、正確な答えが出せるのは何といっても数学に関係のある仕事です。絵描きは絵を描くことができます。しかし完全な絵を描くことはできません。歴史家は、調べた資料が百パーセント真実かどうかわかりませんから、完全に正確な仕事をするのは無理です。地図を作成する人も、まったく正確に書くことは不可能です。複数の人で同じことを見聞きしても、それを表現するとなると、そこにおのおのの違いが出てきます。人間は不正確なものです。しかし計算し、会計の帳簿を付けることは、それとは違います。1+1=2です。これは東京でも、ニューヨークでも、モスクワでも同じです。

みことばはいったいなぜ、ローマ人への手紙6章11節で「自分は罪に対しては、死んだ者であることを思いなさい。」と言っているのでしょうか。それは、もうすでに主とともに死んでしまっているのだから、それを認め、勘定に入れるべきだと言っているのです。

例えば、もしあなたが金銭出納帳をつけるときに、五万円所有しているなら何と書き入れるでしょうか。もちろん五万円と書き込むでしょう。事実五万円持っているからそう書き込むのです。この事実に基づいて、それから計算します。

買い物に行っても、自分は五万円持っているということもいつも考慮に入れておきます。同じように、主なる神は、あなたはもうすでに罪については死んだ者であることを、勘定に入れなさいと言っておられます。それは事実ですから、そうしなさいとおっしゃるので、これは神の命令です。あなたは五万円を持っていますから、帳面にそのように書き入れました。同じように、もうすでに罪について死んでいるのですから、そのように計算しましょう。

主が亡くなられた時、私たちとともに死にしました。ですからもうすでに、罪については死んでしまっていることを計算し、信じ、締め切らなければなりません。このことを心から認めるには、どうしたらよいので

時には、未来を望み見ますが、信仰の大部分は過去にあった事実に基づいています。ローマ人への手紙の後半に多く出てくる「思う」べき内容は、すべて過去の事実に基づいています。ですから、すでに起こった事実を「思いなさい」という言葉を使っているのです。

マルコの福音書11章24節では、主イエス様が「計算する」と同じ意味のことを、言っておられます。

だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。
(マルコ 11:24)

主イエス様にあつて、もう「すでに受けた」と信じましょう。信仰は、主はもうすでに与えられたと言っています。あなたは心から喜びを持って、私はすでにイエス様とともに十字架につけられたと賛美することができますでしょうか。そうできるなら、信仰の計算ができています。

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

でしょうか。それは、私たちの内にあつてではなく、主にあつてのみ可能です。主イエス様を見上げ、イエス様のなしてくださった十字架のみわざを思いなさい。それが計算の秘訣です。

もう少し、この信仰の計算について詳しく考えてみましょう。

ローマ人への手紙の前半は、多く信仰について書かれています。罪の赦し、義とされること、神との平和などは、みな信仰によって自分のものとすることができます。これに対し、ローマ人への手紙の後半には、「信じなさい」ということばよりも、「思いなさい」ということばが多く使われています。しかし、実際には、信仰も計算することも同じことです。

信仰とは何でしょう。信仰とは、神のなされたみわざを受け取ることです。信仰は、いつも過去に行われた事実の上に立つものです。信仰のゴールを考える

ローマ人への手紙3章は、主イエス様が私たちの罪を背負い、私たちの身代わりとなり、私たちを義とし、赦してくださるために亡くなられたことを教えています。ローマ人への手紙6章は、そのイエス様の死が、私たちを罪の性質から解放するためでもあったことを教えています。この始めの3章の事実を啓示によって知った時、主を信じ、罪の赦しをいただきました。主は、この3章(第一段階)にとどまっていなくて、第二段階の、罪からの解放も信じ勘定に入れなさいと言っておられます。

その3 神の事実を体験にする信仰

ここまで「計算すること」について学んできましたが、続いて試みと失敗に対するただ一つの答え、つまり信仰について、少しだけ一緒に考えてみたいと思います。

私たちが、ローマ人への手紙3章と6章が教えてい

る二つのことを計算し、ほんとうに信じたのに、何かの試みがやってきて失敗したとします。その時は、どうしたらよいのでしょうか。ローマ人への手紙6章11節は、架空のもので、実際のものではなかったではないかと、疑問に思うかも知れません。

しかし、決してそうではありません。悪魔が一番ねらっているのは、私たちに神の動かすことのできない、永遠の事実を疑わせることです。悪魔は私たちの心に「お前の内の古い人は、死んでいないじゃないか」とささやきかけることによって、みことばに疑いを起こさせることに成功します。

これに対する私たちの対策はどうか。その時、私たちは目で見、手で触れ、感じることで、わかることができる肉体的な物質的な事柄を信じますか。それとも、「霊的」なものを信じるのでしょうか。

聖書は、私たちが地上にいる限り、私たちの罪の性質は消し去られない、罪を犯す可能性はいつでも持っている、ということを告げています。ですから、私たち

犯すことができない、ということと言っているのです。ですから、私たち信者の内には、二つの性質があります。一つは、罪を犯すことのできない主イエス様のご性質であり、もうひとつは古い人、生まれながらの罪の性質です。したがって、私たちは、自分がどの事実の上に立っているのか、どんな事実に基づいて計算するか、どんな事実によって生きるかが問題となるわけです。

つまり、私たちの内には古い罪の性質がある、という事実に基づいて生活するのか、または聖なる主イエス様が私たちの内に住んでおられる、という事実に基づいて信仰生活を送るのか、それが問題です。この末の世にあつて、どんなに信仰が大切であるか、もっと深く心に刻み込みたいものです。もう一度、信仰とは何か考えてみましょう。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。 (ヘブル 11:1)

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

は絶えず、知る知らないに関わらずもっている罪を赦していただくために、イエス様の血が必要です。そのことを知らなければならぬのです。

罪の性質は、いつも私たちの内に潜^{ひそ}んでいます。しかし私たちは信仰により、日々、この力から解放され、罪の奴隷に甘んじることなく、自らの肢体^{した}を義の武器として神に捧げなければならないと思うのです。ヨハネの手紙第一3章9節に次のように書いてあります。

だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。 (1ヨハネ 3:9)

これによると、古い人、罪の性質からの解放は事実です。もちろんヨハネはここで、信者は罪を犯すことができない、とは言っていない。キリスト者であるがゆえに、その内に宿っているイエス・キリストが罪を

この箇所だけが、信仰に対する説明として聖書に記されています。信仰とは「もうすでになされた事実」を確信し、自分のものとすることです。

私たちは日々の生活において、目で見、耳で聞くことによって事実を自分のものにすることができます。野には赤、青、黄、紫色など色とりどりのさまざまな花が咲いています。もし目を閉じたままではあるなら、その花は、私たちの楽しみには何の役にも立ちません。けれども目を開けると、色とりどりの花が見え、その色が私たちを楽しませてくれます。目の見えない方は、色の区別はわかりません。耳の聞こえない方は、音楽を理解することが難しいです。しかし私たちが、見た、聞いたりしなくても、花に色があること、音楽に音があることは事実です。このように私たちは、目で見て、耳で聞くことによって、実際にあるものを認めて、自分たちのものとします。

今まで学んできた主イエス様が十字架につけられ死んだこと、血潮によって罪が赦されたことは、私たち

の感覚でとらえることができません、信仰によってのみ、目には見えないこと、永遠に変わらない神の事実を自分のものとするができるのです。パウロは次のように、すばらしい証しをしています。

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4:18)

神の事実は信仰によって私たちの体験となります。多くの人は、ローマ人への手紙6章6節を読みますが、それがその人々の体験となりません。信じる人には事実となりますが、イエス様がせっかくなしてくださった事実も、疑う人や、頭で考える人には、事実となりません。

自分の古い人はイエス様とともに十字架につけられてしまった、ということが肝心です。事実は、人が信じて信じなくても、同じく事実です。私たちの罪の性

質は主イエス様とともに十字架につけられてしまった、ということとは、私たちが信じなくても事実としてあくまで残ります。しかし、信じなければ私たちのためには何の役にも立ちません。「信仰」が、主とともに十字架につけられた事実を体験にまでしてくれま

す。主イエス様の用いられた兄弟がある時病気になるしました。五日間、高熱が出て眠れないほどでした。そのうち、「自分が癒された」という確信をその兄弟は得たのです。しかし外に現れている症状は違います。相変わらず熱は高く、脈は速く、頭は痛いという状態です。その時、悪魔のささやきが聞こえました。「神の約束は、どこに行つたのだ。お前の信仰、お前の祈りはどこにあるのだ」とささやきます。あやうくその言葉に同意しそうになりましたが、もう一度、祈ろうと決意を固め祈り続けようとした。その時、「あなたのみことばは真理です。あなたののみことばは真理です」というみことばが与えられました。もし神のみことばが真理であるなら、見える所の病状は偽りであるはずで

その兄弟は、悪魔に、「いまある熱も痛みも嘘だ。みことばだけが真理であるはずだ」と言い返しました。五分ほどして寝込んでしまいました。目を覚ましてみると、病気は癒されていました。この兄弟が癒されたのは、癒されるのが主の御心であると確信したから癒されたのです。

病には癒されない場合もあります。しかし、主イエス様とともに私たちが十字架につけられたことは例外なく確かです。悪魔の訴えを退けるには、神のみことばを信じる必要があります。私たちはどんなに失敗しても、また悪魔がその失敗につけこんで訴えて来ても、神のみことばを信じていかなければなりません。

サタンは言葉だけでなく、誤ったしるしや感情や、経験を与え、私たちを神のみことばから離そうと努めます。悪魔は私たちの古い人は、決して死なずに生きている、ということをお教えしようと必死になっています。私たちは悪魔のだましの手口にのせられるか、あるいは、神のみことばを取るか、決心しなければなりません。

せん。私たちは、外に現れた状態によって行動するのでしょうか。それとも神のみことばによって、生きていくのでしょうか。

私はベックと申します。これは私が認めている事実です。記憶をなくして、自分の名前を忘れることがあるかもしれませんが、しかしその名前を感じることができなくても、忘れてしまっても、私がベックであることは変わらない事実です。しかし自分で名前を変えて、「ケネディです」と誰にでも言うことにしてみます。これは、なかなか難しいことです。誰に会っても、私は「ベックです」と言わないように気をつけていなければなりません。しかし、うっかりしている時に、「ベックさん」と呼ばれたら、「はい」と答えてしまうことでしょう。事実はなかなか隠せません。ちよつとした時に現れてしまいます。私がベックであることは事実ですから、それを認めることは決して難しくはありませんし、この事実は、どんなことがあっても変わらない事

実です。

同じように、自分が主イエス様とともに十字架につけられてしまったことは、私たちがそれを感じても感じなくても、信じてても信じなくても、またどんなことが起こっても、変わらない事実です。

なぜ、それをそんなに私は確かに知っているのでしょうか。なぜなら、「…ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです」(2コリント5・14)、と聖書が言っているからです。私たちの感覚や理性が認めなくても、事実は事実として残ります。

私たちが、この事実の上に堅く立っている限り、悪魔は指一本触れることはできません。サタンはいつも私たちの確信を揺るがそうとしてやって来ます。もし、私たちが神のみことばに対して疑問を持つようになったら、悪魔の勝利です。しかし神の事実を勘定し、信じている人々は悪魔の手に負えません。コリント人への手紙第25章7節には「確かに、私たちは見るところによつてではなく、信仰によつて歩んでいます。」と書いてあ

ります。あなたは見るところによつてではなく、信仰によつて歩んでいるでしょうか。

次の例話をまだ覚えておられるかもしれませんが、「事実」と「信仰」と「経験」が高い幅の狭い堀の上を、一列になって歩いていました。「事実」が先頭になって歩いていました。この「事実」は、右も左も見ません。後ろも振り返りません。まっすぐ、ひたすら前を向いて歩いています。その次に「信仰」が歩いて来ます。「信仰」が前を行く「事実」を見つめて歩いていた時は、何も起こりませんでした。後ろからついてくる「経験」も、上手に歩いてきます。けれどもある時、この信仰くんは、後ろの経験くんを、気にしました。「経験の奴はいったいどうしているだろう?」と思って、くると後ろを振り向きました。その時、信仰くんの視界から、事実さんの姿が消えました。その途端に、信仰くんはバランスを失って堀から落ちてしまいました。経験くんも信仰くんと一緒に落ちてしまったということです。

悪魔が働きかける目的は何でしょう。信者が主イエ

ス様から目を離し、自分の内を、またいろいろな現象を、目に見える現れを見つめるようにさせることです。信仰はしばしば神のみことばを反駁する、いろいろな出来事に遭遇します。この時に、私たちが自分の感覚を信じ悪魔のだましごとを受け取るか、または主なる神のみことばに反する全てのことをしりぞけて、神のみことばに堅く立つかが問題です。私たちの態度ひとつで、神のことばを否定しようとする材料がなくなるか、あるいは私たちの信仰がなくなるかが決まるのです。目に見えないものは永遠にとどまる、ということ

を深く考えましょう。もし私たちが主のなされた事実を目を向け続けるなら、一步一步、その事実が私たちのものとなってくるはずです。主イエス様が私たちの「義」であることが現実となり、主イエス様が私たちの「聖」であることが私たちの内に実際となり、また「よみがえりのいのち」が私たちのものとなってくるのです。パウロはガラテヤ人への手紙を書いたときにこのことを考えていました。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。(ガラテヤ 4・19)

信仰によつてのみ、永遠の客観的な神の事実が、私たちの主観的な体験になります。最後に、主イエス様の内にとどまり続けることの必要性について考えましょう。

その4 主イエスのうちにとどまり続ける

ヨハネが主の語られたことばを記しています。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。(ヨハネ 15・4)

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」。前に何度も言いましたが、聖書の中には「私たちの罪の性質が取り去られた」とは書いてありませんし、「私たちは自分自身にあって死んだ」とも書いてありません。私たちは、「キリストにあって」死に、「罪の性質の働き」は殺された、ということが書いてあります。

もう一回言いましょう。私たちはキリストにあって死に、罪の性質の働きは殺されたと言っています。もし私たちがこの事実を信じるなら、そしてキリストの内にとどまり続けるなら、これが私たちの体験となってくるはずで

す。聖書は、力を尽くしてキリストの内に「入り込みなさい」とは言っています。もうすでに、私たちはキリストの内に置かれているからです。主イエス様のご命令は、「わたしの内に入れ」ということではなく、「わたしにとどまりなさい」ということです。私たちが、主イエス様の内に入れられたのは、主である神のみわざ

になし遂げられました。

もしあなたが、キリストがあなたのために行われたことを信じ、計算するなら、主がなされたことが、そのままあなたの体験となってくるのです。主イエス様の経験が、あなたの経験となります。しかし、もしあなたがこの神のなされたみわざを認め勘定に入れることをしないで、自分の内を見つめ、自分が経験できるように追い求めるなら、聖書に書かれていることと反対のことを経験するようになってしまいます。つまり、古い人と罪の性質は少しも死なずに、非常に元氣であることに気がつくに至るでしょう。

主イエス様の内にとどまり続けるというのは、どういうことでしょうか。

それは、どんなことがあっても、永遠に変わらない神の成就された神の事実の上に立つことを意味しています。キリストとともに死に、ともによみがえらされ、ともに天の座に着く者とされ、キリストにあって霊の祝福にあずかる者とされた、という事実の上に立つこ

イエスの救い(4) 進歩への道「計算すること」

でした。私たちがなすべきことは、ただその内にとどまり続けることです。

主である神は、その救いと解放のみわざをキリストの内に行われたのであって、私たち個人の内に行われたのではありません。これを知ることが必要です。

この救いと解放のみわざを、神は「私たちのために」行われましたが、「私たちの内には行われませんでした。主なる神は、このみわざを全て御子、イエス様を通して「イエス様の内」に行われたのです。ですから、主の体験が、私たちの体験とならなければならないのです。

主イエス様から離れては霊的な体験はありません。神が全てのみわざを、御子イエス様にあってなし遂げられました。私たちは、キリストとともに十字架にかけられ、キリストとともによみがえらされ、キリストとともに天の座に着くものとされ、キリストによって満ち足りたものとされ、キリストにあって、霊のもろもろの祝福をもって、祝福されるようになったのです。全てのことを、私たちの内にはなく、キリストの内

を意味します。この神の事実、神のみわざは、目に見えませんが、ですから私たちは目に見えるものによらないで、すなわち外に現れた状態、自分の失敗、生まれながらの罪の性質には目を向けないで、私たちのためにキリストにあって行われた事実を目を留めて、それを認め、はつきりと計算して歩みたいものです。そうすれば、主イエス様のなされたことが私たちのものとなるのです。主なる神がキリストにあって行われたみわざは、私たちの信仰によって、私たちの生活に実現していきます。

私たちは、自らの古い人、罪の性質を殺そうと試みたり、またそれを隠したり、良く飾ろうと試みたりする必要はありません。よみがえりのいのちをもって生活し、だんだんに完全な者になろうと試みる必要は少しもありません。もしそうするならば、それは掟おきてによって自分を縛り、絶望に陥ってしまうでしょう。私たちがどうしてもしなければならぬことは、ゆだね、信頼することです。試みることに、ゆだねることの間

には天国と地獄ほどの違いがあります。

あなたは主イエス様が死んだ時、キリストの内にありました。主がよみがえられた時、あなたは主の内に置かれていました。主イエス様が父なる神の右に着座された時に、あなたは主の内にあったのです。この事実を勘定に入れて計算するなら、イエス様の体験はあなたの体験となります。

主なる神はあなたをキリストの内に置いてくださいました。ですからイエス様の身に起こったことは、あなたの身にも起こったのです。頭^{かしら}になされたことは、肢体にもなされたわけです。

多くの信者たちは、新しい祝福、新しい経験を求め、また自分の内から溢れ流れ出る御霊に満たされた生活を追い求めています。これらを、心から願ひ求めています。これらはみな主イエス様のご人格から切り離すことのできないものであることを、忘れてはいけません。主イエス様に向けて、私たちの心の目が新しく

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。…このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。

(ローマ 6:6、11)

開かれることによってのみ、まことの経験を自分のものとする事ができるのです。それ以外の祝福も経験も、全ては一時的なものであり、やがて消え去ってしまうのです。まことの経験を得たいなら、イエス様にあつてなされた事実を心の目で啓示によって見て、信じ、計算しなければ、自分のものとする事はできません。主なる神は全てのことを、御子主イエス様の内になされました。そして私たちを御子イエス様の内に置いてくださいました。ですから、私たちがそれを信じてても信じなくても、イエス様が体験されたことは私たちも体験しているのです。不信仰によって、この尊い事実は何の役にも立たないものとなります。しかし信仰によって、イエス様の体験は私たちの体験となり、私たちは栄光から栄光へ、主と同じ姿に変えられていくことになるのです。

最後にもう一度、ローマ人への手紙6章6節、11節を引用して終わります。

〔註〕

ローマ人への手紙6章11節の「思いなさい」ということばに関して、他の聖書では以下のように翻訳されています。

新改訳2017では「認めなさい」、聖書協会共同訳では「考えなさい」、口語訳では「認むべきである」、NKJB (New King James Bible) では「reckon」(計算する、思う、推測する、みなす、考える)とあります。

また、原語のギリシャ語では「λογίζεσθε」(あなたは数える)という単語が使われていますが「λογίζεσθαι」の意味は計算する、勘定する、論拠を検討する、認める、考える、などです。

(編集者より)

本メッセージは、「ロバの子サバー」の「ベック兄 暦年ファイル」に録音テープが収録されています。

次回掲載予定は、イエスの救い(5) 進歩への道『ささげること』です。

老いたら一層あなたの創造者を覚えよ

藤原民雄

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわざ
いの日が来ないうちに、また、「何の喜びもない。」と言
う年月が近づく前に。太陽と光、月と星が暗くなり、
雨の後にまた雨雲がおおう前に。その日には、家を守る

者は震え、力ある男たちは身をかがめ、粉ひき女たちは
少なくなつて仕事をやめ、窓からながめている女の目は
暗くなる。通りのとびらは閉ざされ、臼をひく音も低
くなり、人は鳥の声に起き上がり、歌を歌う娘たちは
みなうなだれる。彼らはまた高い所を恐れ、道でおびえ
る。アーモンドの花は咲き、いなごはのろのろ歩き、ふう
ちようぼくは花を開く。だが、人は永遠の家へと歩いて
行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。こうしてついに、
銀のひもは切れ、金の器は打ち碎かれ、水がめは泉のか

たわらで碎かれ、滑車が井戸のそばでこわされる。ちり
は、もとあつた地に帰り、霊はこれを下さつた神に帰る。
空の空。伝道者は言う。すべては空。

(伝道者 12:1-8)

若い時は、自分の能力を頼みとし、自己実現を目指
して頑張った人も、快楽や趣味に生きてきた人も、人
生何をすべきかと悩みつつ生きてきた人も、仕事中心
で生きてきた人も、いつの間にか夢破れ、定年を迎え、
老いていきます。

そのありさまは伝道者の書に文学的に描かれてい
るように老化して身体機能が低下し、近しい者が死ん
で孤独になり、やがては自分も死んで肉体は土に帰り、

霊はそれを授けた神に帰ると言われています。このよ
うな人生は実に空虚である。だから若い日にあなたの
創造者を覚えよと伝道者は言っています。

「伝道者の書」の著者は紀元前九五〇年頃の古代イ
スラエルの王国で最も栄えた時の王であるソロモンと
されています。しかし、霊は神に帰ると言われても理
解できず、死の恐怖だけが大きくなります。しかも今
の世の中はその当時よりもはるかに高齢化社会となり、
健康第一で過ごそうとしても病気は避けられず、医療
の進歩で病気を抱えたまま長くつらい日々を過ごす人
は昔よりはるかに多くなっています。平均寿命と健康
寿命という二つの寿命があります。健康寿命は健康上
の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期
間と定義されています。平均寿命と健康寿命の差は男
性で約九歳、女性で約十二歳です。この差の期間多く
の人々は何らかの健康上の問題を抱えながら生きてい
かねばなりません。どのような思いで生きていくので
しょうか。ですから若い人はもちろん、老いたらなお

一層私たちは創造者を覚えなければなりません。
神様を認めず、野心と自己実現を目指す人について
聖書はなんと云っているでしょう。

あかつき
暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落
ちたのか。国々を打ち破つた者よ。どうしてあなたは地
に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は
天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、
北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、
いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに
落とされ、穴の底に落とされる。(イザヤ 14:12-15)

自分の意思を優先し、自分の判断と価値基準によつ
て目標を定めて行動することは、この聖句で「あなた」
が心の中で言ったように思うことと同じです。しかし
多くは自分の思うようにはいかず、失望に終わります。
もしも目標が達成されても、それによって高慢の思い

老いたら一層あなたの創造者を覚えよ

に満たされ、いずれはよみという深い穴の底に落とされることになります。

神様が求められるのは自己実現ではなく、むしろ自分自身に頼ることを止め、絶対者としての神様を認め、神様に降参することです。

いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためである。」

(イザヤ 57・15)

主は心の打ち碎かれた者の近くにおられ、たましいの碎かれた者を救われる。

(詩篇 34・18)

人は年を取って身体が衰え、病気がちになったら自動的に考え方が変えられ、神様に降参するでしょうか。むしろ老いの兆候を覚えて、自分の力で物事が出来な

まわすことは傲慢^{ごうまん}です。」

老いて生きる事は価値が無く、他に負担をかけることは耐え難いとの思いは人の価値判断であり、愚かである神に対する罪ですが、神様の価値判断はそうではないとの言葉は味わうべきものです。

では、どうすれば自分中心の思いが碎かれ、神からの価値の宣言を聞き、救^{すく}しの体験をあたえられるのでしょうか？

それは神様が私たちをどのように見ておられるのかを知ることから始まります。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。

(イザヤ 43・4)

わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべて

老いたら一層あなたの創造者を覚えよ

くなることを恐れるのではないでしょうか。それは、自分を頼みとすることの裏返しにすぎません。そのような考え方を変えられることが必要です。

あるイエス様を信じる方が「老いと死」について次のようにメモ帳に残していました。

「『老い』『死』はすべての人に静かに近づいています。それを迎えたくない思いと納得できない矛盾が感じられるようになりますが、それが『老い』であると言えます。『老い』というのは生きていることが価値を生み出さないだけでなく、他に対して負担になるという耐えがたい思いは、(人の)価値(基準)によって判断しようとする人間の愚かさです。人間の存在の価値を人間みずから宣言することが罪であり、神からの価値の宣言を聞く驚きが救^{すく}しの体験であると言えます。老いる者はいかなる日々も感謝してお受けしていくべきです。人の価値への絶望は誤り、人の価値(基準)を振り

の残りの者よ。胎内にいる時からになれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

(イザヤ 46・3～4)

主なる神様とイエス様はこのように私たち一人ひとりを愛してくださっており、私たちを背負って救い出してくださる方です。そこには、若いから老いているかによる区別はありません。全ての者が神様に愛されており、背負って救い出してください。この主のご愛を知り、自分中心のむなし生き方から逃^{のが}れ、永遠のいのちをあたえられたいと願うならば、イエス様は必ずそれをかなえてくださいます。

心を尽くして主に拠^より頼め。自分の悟りにたよるな。

(箴言 3・5)

しかし、多くの方は主の救いをいわゆる「宗教として」捉え、「さわらぬ神にたたりなし」そして、何か事が起きると「苦しい時の神頼み」、しかし、事が解決しないと「もう神も仏もあるものか」と投げ出してしまします。しかし神様はどのように侮られる方ではありません。自己実現の目標を変えて、宗教を勉強し、理解して悟りを得ようとする方もいます。しかし、信仰はどのような努力で得られるものではありません。

また、私たちにはどうしても避けて通れない罪と死の性質があります。それはつまるところ、私たちが造り主なる神にまともに向き合わないことから来ています。

しかし、この罪と死の性質もイエス様が身代わりとなって始末してくださっています。聖書の言う「罪」は神を第一とせず、神に背くことです。そこから自分を誇り、自分の欲を満たすことを第一として生きるようになります。

しかし、そのような私たちをイエス様は愛し、救おうとしてくださいました。

スト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

(ローマ 8:1~2)

「罪」から解放されなければ神様から断絶され、永遠の死から逃れることはできません。聖書が言っているのは人の罪の性質はどうしようもなく自分では変えられないこと、それだからこそ、イエス様が十字架に架かって私たちの罪の身代わりになってくださったという救いを示すものです。自分自身では何も変えられません。でもイエス様が一方的に私たちを愛し、あわれみ、罪を赦してくださいさるのです。この福音をすなおに受けるならば、私たちは恐れや悩みから解放され、イエス様からの平安をいただけます。イエス様は確かに私たちに良いものを与えてくださいます。

してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。

老いたら一層あなたの創造者を覚えよ

私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいさったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

(エペソ 2:3~6)

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3:16)

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリ

とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう。

(マタイ 7:11)

冒頭の伝道者の書に「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」とあります。しかし、これは年老いたら、もうおしまいということではありません。イザヤ書46章4節に書かれていた通り、年を取ってからでもイエス様は同じ様に私たちを迎え入れてくださいます。若い時にイエス様に出会っても、老年になってからイエス様に出会っても、イエス様は同じ様に報いてくださることを示すたとえがあります。

天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。そこで、

彼はその人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここににいるのですか。』彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』こうして、夕方になつたので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ「デナリ」ずつもらった。

(マタイ 20:1-9)

また、次のような願いも聞いてください

年老いた時も、私を見放さないでください。私の力の衰え果てたとき、私を見捨てないでください。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

(1ペテロ 5:7)

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

(1ペテロ 2:25)

私たちのなすべき終活は、単に身辺整理をすることではなく、またお墓の心配をすることでもないのです。本来居るべき所であり、私たちを養い、守ってくださるイエス様のもとへ帰ること、これが聖書の言う永遠のいのちを与えられることです。それは望みと平安の歩みです。

それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。

(ヨハネ 3:15)

老いたら一層あなたの創造者を覚えよ

(詩篇 71:9)

年老いて、しらがになつていても、神よ、私を捨てないでください。私はなおも、あなたの力を次の世代に、あなたの大能のわざを、後に来るすべての者に告げ知らせます。

(詩篇 71:18)

私たちがイエス様の救いのみ言葉に耳を傾けると、どのような変化が私たちにもたらされるのでしょうか。神の御霊が働かれ、私たちの思いが変えられます。また、思い煩い^{わづら}が取り去られ、イエス様の平安に満たされます。それらのことを約束する聖書の箇所を見ましょう。

肉に従う者は肉的なことをもつぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

(ローマ 8:5-6)

しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

(ヘブル 11:16)

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもつて満たし、聖霊の力によつて望みにあふれさせてくださいますように。

(ローマ 15:13)

藤原 民雄 (芦屋キリスト集会)





天に召されたご主人の泰秀さんと

生涯の良き伴侶として五十一年八か月、苦楽を共にしてきた夫、泰秀は令和元年六月九日天にその居を移しました。出会ってから五十五年、彼の存在は余りに大きく、いま姿形や声の反応がない寂しさがあります。喪失の悲しみや嘆きの涙はなく、「先に住まいを移しただけ。垣根の向こう、目に見えないところにいる」という不思議な感覚です。そこで私を待っていて、その日には門口まで必ず迎えに来てくれるという強い確信があります。

数え切れない主の恵み

松本和子

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。
(詩篇 118・23)

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。
(イザヤ 25・1)



私は昭和二十一年三月満州(現中国東北部)で生まれ、生後百日目に日本に引き揚げて来ました。貧しい中でも順調に育ち、長女として共働きの母を助け、家事を手伝い、第二人の世話をしました。三歳下の弟が、生まれつき脳水腫(のうすいしゅ)という重い病気を持っていたため、私は物心ついたときから弟のそばにいつも寄り添い、悲しみと痛みを共にする助け手でありたいと思いつつ育ちました。当時は障害者の生きる道は厳しく、家族も肩身の狭い思いをしていましたから、「将来は経済基盤の確かな男女格差のない職業について、世間の好奇(こうき)な目にさらされない静かな環境で弟の面倒をずっと見ていく」という覚悟が自然に備わっていました。

ともかく教職について「弟の面倒を見る」という考えでいた私ですが、大学一年の冬、卒業を控えた松本の突然のプロポーズを受け、三年後の秋に結婚しました。結婚の意思などあまりなかった私にくると向きを変えさせたのは、「あなたが持つ重荷を僕も一緒に

持とう。二人で持てば軽くなるよ」という彼の優しい言葉でした。主人は約束通り、私の実家の様々の問題に誠実に関わってくれ、両親や弟たちにも本当に良くしてくれて感謝でした。

寺の次男の嫁として

彼は長野県北小谷(きたおたに)の寺の次男で、寺の大きな行事のときには、幼い息子たちを連れて長期間滞在し手伝っていました。私の実家には仏壇はなく、仏式の作法が全く分からないままで、そんな私が僧侶であるお寺の次男と結婚したわけですから、すべてが学びであり発見であり、驚きでした。

しかし時が経つにつれ、弟のような重度の障害者に対して、仏教では人間的な愛の施し(ほし)、慈しみのまなざし、悟りや諦め(あきら)の勧めはあっても、「生きる喜び」、「目的や張り合い」のようなものは与えられないということが次第に分かってきました。そして、信じている有

難いはずの御本尊(ごほんぞん)や他の仏像たちへの檀家衆の態度がおかしいのではないか、という思いも芽生えてきました。また義父母の生活は質素を旨とする一方、お布施のほとんどを寺の高価な装飾や仏像・仏具を次々と購入することに使っていました。晩年には何かに取り憑かれたかのようなでした。

山の中にある寺には、こうもりが飛び交い、どんな隙間からでも入り込み、びっしりと並べられた大小の仏像の上に糞(くん)や尿を落としますから、夕暮れ時になるとシートを縫い合わせた巨大な幕のようなものをかぶせ、朝には取り除く作業に追われました。ずっと後になって聖書に偶像の記述を発見したとき、思わず目を見開き「本当にその通り」とうなずいてしまいました。

袋から金を惜しげなく出し 銀をてんびんで量る者
たちは、金細工人を雇って、それで神を造り、これにひざまずいて、すぐ拝む。彼らはこれに肩にかついで運び、

下に置いて立たせる。これはその場からもう動けない。

(イザヤ 46:6~7)

昭和五十年、主人が南アフリカでの事業支援に単身赴任したのをきっかけに、私は福音派教会の「英会話教室」に通い始めました。結局、私が南アに行くことはなく、英語力は大して進歩しなかったのですが、教室で会った、クリスチャンの姉妹方や友人との交わり、宣教師夫妻の生き方に感化されて、日曜にも教会に行くようになつていました。主人は妻の変化に驚きながらも、見聞を広げるのはよいと軽く考えていたようです。

北小谷の舅(ちち)は一時期、親戚にあたる南木曾の寺の兼務住職をしていました。ゆくゆくは北の長男と南の次男が力を合わせて長野県の仏教界に貢献してほしいと願っていました。主人は会社勤めをしながら、父や周囲の期待に応え、その寺に通っていました。しかし、寺の務めの要請があるときに、なぜかいつも私

は具合がとても悪くなり、同行はかありませんでした。そのうち、舅の独断的生き方や地域の複雑な人間関係、私の体調不良等が重なり、南木曾でのお務めは十年ほどして閉ざされました。今にして思えば、あのとき私の体が強行日程に耐えられるほど頑丈で、さらに檀家衆とも如才なく対応できていたら事態はどうなっていたかと思うと、ただただ主の前にひれ伏し、御守りと導きに感謝するのみです。

主イエス・キリストとの出会い

平成元年晩秋、重い障害を四〇年背負ってきた弟が天に召されました。彼の最後の闘病生活八か月間を通して、私は劇的に主イエス・キリストに出会い、キリスト者の道を歩む決心をしました。英会話教室の宣教師から手渡された本「私たちの国籍は天にあります」(重田定義著)を一気に読み、本に書かれた集会に集いたいと手紙を書きました。願いは瞬く間にかなえられ、七か

月後には我が家で初めての家庭集会が開かれました。その夏、当時軽井沢で行われていたキリスト教会主催の「喜びの集い」で初めてお会いしたベック宣教師に「主人の許可をもらってから受洗したい」と告げました。「許可を取る必要はない。主人には『洗礼を受ける』と言えば良いよ」とのベックさんの返事に少し驚きましたが、その指示に従い、九月二日受洗しました。

主人のほうは、自分の裁量で妻が教会に出入りすることは許していても、忍耐はそこまで、まさか洗礼にあずかるという予想もなかった展開に、その動揺はただ事ではありませんでした。しかし私はどんなに反対されても、弟との「天国での再会」という約束を変えるわけにはいかず、まっしぐらに突き進みました。

たとい離縁されてもいい。主人は誰にでも優しい人ですから、寺を継ぐにしても後添いに不自由はしないし、彼の将来は心配しなくても大丈夫と思っていました。

ところが、いつのまにか主人は私の見えないところ

で聖書を読み始めていたのです。次男が、「買い物に出かけたとき書棚から出して読んでいたよ」とそっと教えてくれました。主人は幼いときから村々を読経して回り、学校を早退して葬儀にかり出されていたそうですから、仏教の本質を見抜いていたのだと思います。そして両親が晩年、際限のない仏像集めに走ったことにも疑問を感じていたようです。彼が主イエス・キリストに白旗をあげるのはあつという間の出来事でした。

三か月後のクリスマスに、次男も一緒に吉祥寺集会で洗礼の恵みに与りました。

主イエス様からの訓練

話は前後しますが、昭和六十年秋、姑(はは)が脑梗塞を発症し、義姉の住む松本市の病院に入りました。遠方に住む嫁たちにも、平等に交代看護が求められましたが、あいにく主人は秩父工場に単身赴任中で、私は週三日病院での付き添い、残りの四日間で富山で

の仕事を片付けなければならず、すぐに体に無理が来て二か月足らずで戦線離脱してしまいました。その後、いち早く退散した私への風当たりは相当に強く、翌春にはその付けが回って来ました。

胃がん手術のため東京の病院に移っていた姑は、回復後北小谷に戻りましたが、しかし山の不便な環境に病人を戻す訳にはいかなからと、姑を富山の我が家に送ることが私のいないところで決定されました。

移動の日、姑は行き先を知らされず、私には後一時間半ばかりで到着という糸魚川近辺のパーキングエリアからの連絡でした。一週間前にお見舞いに上京した時には、富山に連れて行くことはおくびにも出さなかった義兄弟たちです。あまりの進展に本当にびっくり仰天しました。ともあれ、そこまで来ている御一行様をどうにかしなければならぬ事は明白でしたから、とるものもとあえず友人に電話してアドバイスを受け、この現実を一時的に受け入れる覚悟はどうかで

6人の証し

きました。

それにしても、姉や兄、弟に言われるままに従い、妻には直前まで言い出せない主人の優しすぎる心根に私は腹が立ちました。到着して小半時のお茶の時間さえ惜しみ、義兄の車ですぐまた帰る彼に、私は愛のない冷たい言葉を発してしまいました。主人にとってかけがえのない大事なお母さんであることに思いが至らず、姑を単身赴任家庭の平安をかき乱す突然の闖入者、邪魔者であるかのように思う自分がいました。一陣の嵐の後に残されたのは、茫然自失している姑と、怒りを抑えきれない私と、戸惑う子供たち、病院からの大量の荷物でした。

当時、高三の長男が母親の苦境を慮り、精神的な支えともなり、姑と私を本当によく助けてくれました。食事とリハビリとお話で姑はどんどん元氣になり、四〇日ほどして長野で待つ舅の元に無事戻ることができました。

したが、四月初め私は網膜剥離の手術を受け、連休直前まで約一か月を病院のベッドで過ごしました。義父の住む小谷村の関係者は「姉さんが大変な病氣になった後なのだから、回復するまで村でもう少し面倒見ようじゃないか」と言ってくれましたが、義兄弟たちは「仕事の休みは変更できない」と予定通り引越しが決行されました。情け容赦もない義兄たちの仕打ちには慣れているとはいえ、またも愕然とした私でした。すべて起こることは私が碎かれ、人ではなく、主にだけ頼るように導かれたわけですが、その時、私の心の中には義兄弟たちへのやるせない思いが充満し、恨みと憎しみでいっぱいになりました。この二か月後、主人がまたも今度は大阪に単身赴任しました。

それからの道のり、主の訓練は並大抵ではありませんでした。周りには嘆きや空しさ、自己憐憫の草木ばかり生えてきて、それらは日ごとに生い茂り、あたかも昼なお暗い樹海のなかにいるような状態が長い間続き

ただ私は、この時点で大きな間違いの道を歩き出してしまったようです。そばにいない主人よりも、具体的な助けを提供し、優しい言葉をかけてくれる息子たちに心を寄せていってしまいました。その刈り取りは、後にきつい痛みを伴うものとしてやって来ましたが、主はすべてをご存じで一つひとつ御計画を進められて、ことごとく益にして下さいました。

平成六年秋、義父母は寺を第三者に譲り渡しました。平成七年一月姑が骨折、富山日赤で手術しました。このことがきっかけになり、その後、二人とも八四歳になつてから、もう雪深い小谷での暮らしは無理だと富山移住が決まりました。「独りでもこの地に住み続け、ここで死ぬ」と拒む舅を説き伏せるのに、姑の一言が効きました。「和子は根性がない。よく泣くし、駄目。だから和子が信じている神様は信頼できるから安心しておいで」。

平成八年春、五月の連休の頃の引越しが決まりま

ました。主に愛されているからこそ起こることであり、信仰がふるいにかけられ、自我の本質が明らかにされるためでした。十字架が自分のためであると認め、イエス様のよみがえりの命に満たされるための訓練に他なりませんでしたが、こうしたことが私の学びのためだけでなく「主の戦い」でもあると気づくまで実に無駄な努力を重ねてしまいました。

平成十一年春、舅の葬儀が懐かしい寺で盛大に執り行われました。義姉に「今日こそは、絶対に焼香してくれ。心はイエス様に明け渡していい。和尚たちや檀家衆の前だから、頼むから親父の面子を立ててやってくれ」と激しく迫られ懇願されましたが、主人はこのとき今まで見たことのない毅然とした態度で断り、頑丈な城壁となつて守ってくれました。

義母は平成十八年七月に召されましたが、晩年、素晴らしい告白を残してくれました。「夜寂しいとき、イエス様に祈るとスーッと楽になつて平安になる。これ

まで長い間住職の夫に仕え、仏の道に精進してきたけれど、これからは誰にも遠慮せず、自分の信じる道を大事に歩いて行きたい」と。

夫の病と死

平成三十年三月、主人は体の不調を訴え受診、主原因が見つからないまま、様子を見ることにしました。五月一日、別の病院で胃がんステージⅡⅢと宣告され、患部だけすっぱり切除すれば元通りの生活ができるとの説明を受けましたが、その場で即決できずに、集会の兄姉らに連絡し、次男に相談しました。次男は十二年前から、千葉県柏市の国立がん研究センターに勤務しており、結局、そちらへ転院することにしました。検査の結果ステージⅣ、もはやすっきり取り切れる段階ではありませんでした。

ともかく食事が口からとれるように胃から小腸へのバイパス手術をしていただき、その後三週間ごとの抗

がん剤投与の治療が始まりました。富山から柏まで通院には前後泊が必要でしたが、毎回すべての行程が整えられ、何の心配もありませんでした。むしろ主は私たち二人にとって最終章になる一連の移動をとりびきりの演出で彩って下さいました。移動中の車窓から見る富士山の偉容や長野市近くの田んぼで舞うつがいの朱鷺、日本海にかかる虹など。一時は抗がん剤がよく効いて、庭の手入れや春に植えた自然薯やコンの収穫もでき、岐阜県高山市へメッセージ奉仕のために日帰りドライブもできました。

しかし年末にはその抗がん剤の効果がなくなり、次のステップとして「治験」を選びましたが、それに参加するためにはもはや柏に借り住まいするしか方法はありません。主の備えてくださった短期滞在向けアパートを借りて、一月末から四月初めの週末まで過ごしました。治験は始めのうちは成果を上げ、私たちはまるで新婚時代に戻ったかのように生活を楽しみました。ワ

ンルームマンションの本当に小さな狭い台所でままごと遊びをしているようでした。日立集会の兄姉のところに泊まりがけで招かれたり、吉祥寺集会や東京近郊の集会にも集うことができました。また多くの兄姉らがアパートにお見舞いに来て下さり主にある慕わしい交わりによって、闘病中の不安や辛さを主は束の間忘れさせて下さいました。

四月初め富山に戻った主人は、趣味の陶芸教室継続を決め、元氣と希望を取り戻しており、まさか二か月後に召されることになるとは思っていませんでした。四月末、検査の結果、D I C（播種性血管内凝固症候群）という、大変危ない病態に陥っていたことが分かり、即入院となりました。ですが、主人も私も危機が迫るものへの恐怖感はなく、主の平安に本当に守られました。そのことで 医師や看護師、リハビリ担当者や薬剤師、掃除に来られるスタッフの方々に言葉ではない姿勢で主にある者のお証しができたのではない

かと思っています。

やがて、主人は次第に吐き気が強まり血痰もひんぱんに出るようになり、私は柏での看取りを覚悟しました。ところが、主人の強い希望で富山に連れ帰ることが決まったのです。そして六月五日、明朝出発というとき、心臓発作を起こし大騒ぎになりました。ちょうどそこに、ご主人を看取って間もない姉妹が突然訪ねてくれました。主はその姉妹を遣わすことで、私が慌てふためかないように心身共に守ってくださったとは思えません。担当医は「この状態では絶対、富山に帰すわけにはいかない」と言い切りましたが、次男は父親の願いを実現する覚悟をし、担当医は真底あきらかえた様子でした。「富山に帰れる」ことを聞いた主人は、私の隣にいた姉妹にうれしそうに手指でVサインをそっと出したそうです。

翌六日、次男に付き添われ介護タクシーと新幹線を乗り継いで富山に到着、富山県立中央病院の緩和病棟

に入りました。道中、あいにくの梅雨空で大好きな立山連峰を仰ぐことはできませんでしたが、地名や訛りなまを耳にして心の底から本当に嬉しうれそうにしていました。

九日未明、控えの家族室で休んでいた私は、「もう最期の時が来たから…」と呼ばれて聖書を持って彼の元に走りしました。かねてから予想し恐れていた臨終の場面とは全く違い、穏やかに横たわる主人と対面し「もうお別れの時が来たのですね。落ち着くために私、詩篇二三編を読むよ」。一語一句かみしめながら、はつきりゆつくり読みました。それからお礼を言いました。

「五十一年も連れ添ってくれて有り難う。ずっと変わらず大事にしてくれて有り難う」

「おう！」

「私が作ったご飯、適当に作ったときもあったけどいつもおいしそうにみんな食べてくれて有り難う」

「おう！」

「私ももうすぐそっちに行く…迷子になりやすい私だから、天国の門口まで迎えに来てね。必ず、だよ」

「おう！」

最期の反応でした。「おう！」という言葉と共に息を吐いて、次の息を吸う動作が止まりました。顔は呼びかけに応えようとして私の方に向けたまま、すうーと主のみ腕に抱き寄せられた感じでした。思わず「夫泰秀の霊をイエス様、お受け取り下さい。有り難うございました」と小さく叫びました。

背後にいた看護師が「霊はまだこの辺にいる。奥さんが話しかけると機器の数値が跳ね上がるから…どんどん呼びかけて」という大声にハッとしました。主人はこの期に及んで証をしているのだと思いました。九日曜、早朝の出来事でした。

五月末、主人はお見舞い下さった姉妹たちに「富山に帰って証しするのだ」と力強く話していたそうですが、普段の生活で周りに信仰告白をする人ではなかつ

たので、私は内心「元気なときにできなかったことが病気になるってできるの？」と本気にしていませんでした。しかし、どこでどう導かれていったのか正確に思い出せないのですが、集会の兄弟姉妹方で葬儀をしていただくことになりました。準備のときから、見えな

い大きな力でぐいぐい引つ張られている感覚でした。聖書のみことをメッセージしてくださる方、奏樂のご奉仕をして下さる方々も主が見つけて下さいました。奏樂で使われるキーボードも夫の懐かしい写真を取めるパネルも急遽整きんぐさいました。当日は、あちこちから大勢の集会に集まれる方々が寸暇すんかを割きいて駆けつけて下さいました。主のご用のために喜んでではせ参じてこられたその方々の敬虔なたたずまいに、会社員時代の元同僚や知人友人近所の方々がびっくりしていました。

葬儀から二か月後、令和元年夏、かつて対応に苦慮していた義姉の心が主によってどンドン変えられてい

るのに驚きました。「弟が最期まで平安を保ち笑顔で闘病できたのは貴女のおかげ、懸命に支えてくれて有り難う」とお礼を言われ、「弟の分も長生きしてね」と付け加えられたので「私は主人のいないこの世にそう長くはいたくありません。それにもうすぐそっちに行くからと約束を交わしたので…この世の後始末をしたら、もう未練はないのです。」と応えました。

彼女はすかさず「泰秀には待たせておけば良い。二人で歩んで築きあげてきた信仰と、いただいた平安をもっと他の人にどンドン伝えていかなければいけない。貴女はその務めをするために選ばれた人だから、泰秀は喜んで待っていてくれる」と、まさに我が耳を疑うようなやりとりでした。主人にとって大事な家族の救いが約束されていることに感謝しました。

そして義兄弟に対する苦い思いは半分薄れてきており、今ではあの一連の事があったからこそ、人の力に頼るのではなく、主を慕い求め、主の導きに従い通す

姿勢が養われていったのだと感謝できるようになりました。

私はとこしえまでもあなたに感謝します。あなたが、
こうしてくださったのですから。
(詩篇 52・9)

私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリスト
の力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出
した作り話に従ったものではありません。この私たちは、
キリストの威光の目撃者なのです。(2ペテロ 1・16)

松本和子(まつもとかずこ)

一九四六年三月生まれ、比角^{ひすみ}小学校、第二中学校、柏
崎常磐高校、新潟大学教育学部卒

夫 泰秀(やすよし) 天国



長男 裕文(ひろふみ)
次男 禎久(よしひさ)

主は忍耐をもって導いて
くださった

佐久間 邦雄



奥様の敬子さんと

私は一九四〇年に新潟県の飯豊朝日連峰^{いひであきひめつね}二王子岳^{にのうしじだけ}の麓、新発田市で生まれました。私が初めてイエス様のことを知ったのは、結婚して娘が与えられて三歳になった頃でした。娘が教会の日曜学校に通い始めたので、私はその送迎をしていました。娘はその後、その教会の付属幼稚園に入園しました。一方、私は教会の皆さんが熱心にメッセージを聞き真剣に祈る姿を見て、どこか違う雰囲気を感じて近寄りたかったこともあって、まだ私には信仰の必要はないと、自己防衛していました。それでも教会の行事やキャンプ等に誘われて参加した時もありました。

妻は教会で受洗の恵みにあずかりました。私は、妻が自分勝手だがままな夫よりも、主イエス様を信頼したものだと思い込み、かえってイエス様から離れてしまいました。私は、自分自身の本当の姿を知らなかったのです。

私は高校卒業後、上京して製造業の会社で生産技術や生産管理の仕事をしていました。十三年後、世間知らずで何の力もないのに浅い経験と未熟な人間関係を過信して、自立(自営)したのです。私にも出来ると思ひ込み、高ぶっていたのです。仕事で得た友人たちを信頼し、精一杯、背伸びして共に走っていたのです。しかし世間は甘くなく、自分の思うように出来ず挫折してしまいました。そんな時に友人の会社が倒産してトラブルになり、巻き込まれてしまいました。自分の判断の甘さが招いた結果でした。妻にとっては動転する出来事でした。そんな折、実の兄弟姉妹、友人や教会の皆さんがトラブル解決のために協力してください、解決することができました。妻は主イエス様への信仰を持っていましたので、冷静に協力してくれました。その事を通して妻のイエス様への信頼の深さを感じ、信じる者の強さを見せられました。一方私は、イエス様を信じて抛り頼むことを見せられましたが、自分

には出来ないと思手に判断していました。

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3:5~6)

私は自我が強くて他人の意見に耳を貸すことが出来ず、自分の非を認めずかたくなな者になっていたのです。信仰を持つなど考えてもいませんでした。

自分勝手な私を見て妻が聖書をプレゼントしてくれました。そして主イエス様を信じること、また、抛り頼むことができるように祈ってくれました。これを機会に聖書を持ち歩くようになりました。教会に集っている皆さんは、いつも主に祈って抛り頼むことを教えてくださいました。それでも、私は自分のこころを開いて祈ることが出来ませんでした。

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

(ローマ 9:15~16)

その後、妻は教会を出てキリスト教会に集うようになりました。妻は私を礼拝に誘ってくれましたが、集ってみて驚きました。牧師がいなくて、男性の信徒による祈りと皆さんの賛美で礼拝がもたれていたからです。私は戸惑いを感じましたが、なぜかやすらぎを持ちになりました。そんな集会に集うことは嫌いではなかったのですが、自分の内側を主イエス様に見られることを恐れる小心者でした。

集会の皆さんに誘われて初めて御代田に集うことになり、驚きました。大きな会堂を外国の大家さんと、集会の皆さんが協力して建てていました。集会の皆さん

んは明るい笑顔で会話していました。私は皆さんから何か違うものを感じました。ベックさんの別荘で、四名の信仰に導かれつつあるご主人たちといっしょに、ベックさんからお話を聞くことになりました。ベックさんは大きな手で握手をして迎えてくださいました。その時に何を話してくださったのか全く覚えていませんが、ただとても穏やかになり何かを感じたのです。しかしそれでもまだ私はイエス様を信じることは出来ませんでした。

トラブルを解決でき、また新しい仕事を目指して求職活動をしました。四十歳で新しい職場が与えられ、気持ち新たに家族のため自分のために若い人たちと共に学び、イエス様を忘れて仕事に向き合いました。職場の人たちに恵まれ自分でも納得できる職場になったことで、自己満足していました。いつしか自我が顔をだし、一方的に自己主張するようになってい

たのです。そのような時に、新しく上司が変わり、職務担当を変えられたのです。私は納得できませんでした。新しい職場は問題が山積し、すぐさま解決できる状態ではなかったのです。この状態を会議で説明しても理解してもらえず、いつも上司から責められていました。スタッフ一同協力して毎日、朝から深夜まで懸命に問題解決のため作業しましたが、私は被害者意識をもって上司を非難しました。

すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。 (ローマ 2:1)

それまでは順調だったため、それを否定され、いじめられていると思い込み、醜い自分をさらけ出していました。出る杭は打たれると、勝手に判断して自分を

正当化して、憎んだり、恨んだりして自分の愚かさに気が付いていませんでした。落ち込んだ気持ちで礼拝に集うようになり、イエス様に何かを求めています。集会の皆さんが祈っている言葉の中で「へりくだり」が耳に残りましたが、今の私には神の前でへりくだることなどできないと思いました。相手をさばく自分を、ただ自分で責めていたのです。このような状態に陥り、ますます自分がかたくなになり、性格まで変わりそうで恐ろしくなりました。これを引き起こしているのが自分の自我であることにまだ気付いていませんでした。

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じます。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。 (ルカ 16:15)

やがて自分勝手な私にやっと主イエス様に拠り頼

もうこの思いが、わき起こりましたが、かたくなな私はイエス様と素直に向き合うことが出来ませんでした。そんな時、集会の方がメッセージの中で、イエス様を信じるとは、まず自分の罪を悔い改めて、告白して救われることだと語っていました。「自分の罪とは何か?」これが最初に考える問題でした。法律を犯すことが罪であると勝手に思い込んでいました。ほんとうに何も理解出来ていませんでした。これではイエス様を信じることなどできないと弱気になっていました。仕事の方は無理な作業で疲労困ぱいし、このまま続ければ過労死になる状態でした。上司との確執も修復できず弱い自分から逃げたくなり、自分勝手に退職を決意したのです。この時が主イエス様に助けを求めるチャンスでしたが、楽な方に逃げてしまいました。

会社を退職して冷静になってみると自分の愚かさがようやく分かりかけ、自分が間違っていることに気が付いたのです。自分の気持ちを整理してイエス様に

祈れるようになりました。長い間、主が共にいてくださったことを感謝しました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。 (1ヨハネ 1:9)

退職後、通院しながら求職活動し、新たな職場が与えられました。その間に集会や礼拝に集い自分を見つめ直していました。新しい会社に勤め始めて一か月が過ぎたころ、以前の会社の元上司からの電話が鳴りました。また一緒に仕事をやろうと依頼されたのです。妻は反対しましたが、イエス様の導きと思い、応じることにしました。まだ、わだかまりはありましたが、イエス様が、元上司との再会を備えてくださったことを素直に喜びました。元上司(以降、彼)は香港に転勤しており電話は香港からでした。打ち合せて香港に行く

ことになり、主に祈りました。自分が素直に謝罪することが出来るようにとです。ところが、お会いして驚きました。彼はすっかり変わっていました。彼から「あの時はすまなかった」と先に謝罪されたのです。私は自分の心の貧しさを痛感しました。私の愚かさを主が教えてくださったのです。彼はとても親切に接してくださいました。これが本当の彼の姿だったのです。香港に赴任してからは自分の心のうちに変化が起き、人に対する態度や言動が知らず知らずのうちに変わってゆきました。それまでは人を恐れて謝罪がなかなかできませんでした。何故か素直に詫わびることができるようになったのです。自分の中では大きな戦いがありました。実行してみると気持ちに穏やかになり、主イエス様を信頼し早く拠り頼んでいればと悔い改めました。

香港での仕事は、中国への返還時期と重なり大変な

状況でした。香港の人たちは目が輝いていました。何かを得ようとして真剣に向き合っていました。沢山の知識や技術の協力を得て仕事は順調に進みました。職場は彼との関係も良く、喜べるように自分が変わったことを主に感謝しました。イエス様をいつも意識するようになりました。仕事は予定通りに終わり、彼は次の職場を用意してくださいました。帰国後も良い関係が築かれました。イエス様に初めて出会ってから十六年が経っていました。本当に歩みの遅い者でした。

十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであつても、救いを受ける私たちには、神の力です。

(1コリント 1:18)

この世で信じられるただ一人の神、主、イエス様に求めれば真の解決をみる事が出来ることを知り、私の心は軽くなりました。

次の赴任先であるタイ国に行きました。一九九八年

五八歳の時でした。単身赴任で職場の近くの日本人の寮(ドミトリ)で生活することになりました。タイは温暖で過ごしやすく何でもありの国でした。典型的な仏教の国でした。夜、寮の皆さんはバンコクに遊びに出ていました。私はイエス様が共にいてくださいましたので、メッセージテープを聞き聖書を読んで過ごしましたが、聖書は難しく私の頭では理解できませんでした。このような生活で人付き合いが悪く変人に見られていることが分かりましたが、私は信仰を持っていることを証しすることで、理解を得ることができました。翌年(一九九九年)、二月にバンコク喜びの集いがあると連絡を頂き訪ねて行きました。そこでベックさんと再会し、お話することができました。主に感謝しました。また、バンコクでは日曜礼拝や集会が行なわれていることを知り、驚き、喜びました。それはイエス様から離れると歩めない私のために備えてくださった

と思いました。それからは日曜礼拝や集会に集えるよう、日程を調整しました。タイに駐在中の集会の皆さんと共に主を礼拝することが出来るようになりました。礼拝がいかに大切か実感しました。バンコク集会は小さい集会でしたが、アットホームで皆さんが主を礼拝する姿は感動的でした。いつも主イエス様が中心におられ、主が愛されている集会で信仰の浅い者にも主は恵んでくださいました。

仕事は新しいプロジェクトを立ち上げることでした。言葉がネックになり自分の思いをタイの人たちに伝えることは容易ではなく、思い悩む日々でした。イエス様に祈り続けました。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。(ローマ 12:2)

また自己中心の高慢な思いが出てきて、日本で学んだことが正しいと思い込み、無理やり教えようとしていました。思うようには進まず、ストレスがたまり体調が悪くなっていました。それがすべて自分から出ているのに気が付きませんでした。

あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。
(箴言 16:3)

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」
(ルカ 18:27)

ある時、開き直って、どうせできないなら主が示してくださったことをしてみよう、タイの人たちに任せてみようと思いました。あせる気持ちを抑えて、方向転換したのです。勇気と忍耐が必要でした。後戻りする可能性もありましたが、しだいにタイの人たちが真

剣に取り組み、コミュニケーションを取り、早い回転でまわり軌道にのったのです。赴任して一年半過ぎていました。主はこの愚か者に「わたしを信じて拠り頼め」と戒めてくださいました。私は何も分かっていなかったのです。ことばも覚えタイの人たちとコミュニケーションがとれるようになり、順調に進むようになり、主に感謝しました。

あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。
(ヨハネ 15:16)

聖書を読んでもメッセージテープを聞いてもイエス様を理解する事が出来ず、自分の信仰に悩んでしまいました。信じるのがいかに大切か。主は、またも私の罪を再認識させてくださり、身代わりにイエス様を十字架にかけられたことに気づかせてくださいました。

こんな私にイエス様は一方的に恵んで下さったのでした。みことばを理解出来ない者と一緒に歩んでくださることに感謝しました。イエス様は自分勝手な私を救うため、長い間、忍耐と愛をもって導いてくださいました。

そして、二〇〇二年二月のバンコク喜びの集いで受洗することになりました。私の救いのために長い間祈り続けてくれた妻にプレゼントしようと思ひ、洗礼を受ける三十分前に伝えました。ビックリと喜びで大変でした。大きなホテルのプールでベックさんにより受洗に導かれました。本当に人生が変わったのでした。今まで持っていたものをすべて洗い落とされ、さっぱりしました。新しい歩みの出発でした、思えば長い道のりでした。こんな私のため祈ってくださったバンコク集会、日本各地の集会、春日部集会の皆さんに感謝しました。二十年の長きにわたり祈り続けてくれた妻の敬子に本当に感謝しています。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。

私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。
(詩篇 119:71-72)

二〇〇四年、六年半滞在していたタイ国より帰国しました。最初にやりたかったことは集會に集うことでした。集會の皆さんとのふれあいの恵みを求めて、喜びの集い、家庭集會に参加し、多くの集會の皆さんと心から語らうことができました。こうして皆さんとのふれあいを通して感じたことは、自分の信仰は浅く、みことばの理解ができていないことでした。また、自我を捨てきれず罪を犯して歩んでいたことです。自分では何もできない愚かな者であると知りました。でも、イエス様は一方的に愛してくださり、私の前を歩んでくださいますから感謝です。これから、このころの内にいてくださる御霊様と、イエス様のみこころを求め

て歩みたいと思います。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。

(ヘブル 11:6)

佐久間 邦雄 (さくまくに お)

新潟県新発田商工高校卒、トステム久喜(株)、トステム香港(株)、トステムタイ(株)、日本科学産業(株)

妻 敬子

長女 厚美



イエスさまの十字架の愛

佐久間 敬子



ご主人の邦雄さん(一番右)らと

私は一九四六年東京大田区で生まれました。父はサラリーマン、母は和服の仕立ての内職をしていました。宗教的行事として神棚に手を合わせることや、お盆、お彼岸、年末年始などには、何の疑問も持たず、家族と共に行っていました。私は幼い時から、姉、兄と比べて母親にとっては、悩みの種であり、心配な子供でした。やがて箸が転がってもおかしい年ごろを過ぎ、高校を卒業して証券会社に入社しました。社会人になりましたが、大きな問題もなく人間関係にも恵まれた環境の中に置かれていました。というより、人生や社会の諸問題に関心の薄い者で、深く問題意識を持つことなく過ごしていました。

結婚へ、教会への導き

二十六歳のとき、ご近所の方の紹介で夫と出会いました。その後、一、二回お会いする中で、彼の横顔を見ながらこの方と結婚するだろうなと思いました。イエ

スさまのことは何も知らない未信者同士の結婚でした。その時すでに父、市川鶴吉は六十一歳の時に肺がんで亡くなっていました。母、市川さとは兄夫婦と同居、私も一緒に暮らしていました。

結婚生活がスタートし、それまでは自分なりの考えで、出来ないながらも何かと悩みながら、良くしようと、頑張つて来たつもりでした。しかし自分はわがままで愛のない者であることを見せられたのは、育児の時でした。娘が八か月の時、足立区から春日部に越してきました。相談する人もなく育児書を読み、子育ての講演会に参加する中で、娘と同じ年のお嬢さんをもつお母さんとお会いしました。その方はミッシヨンスクール出身の方で、教会の日曜学校のことを教えて下さいました。早速、娘を日曜学校に通わせて半年ぐらいが過ぎた頃、幼稚園に入園する年齢となりました。入園にあたって、日曜学校で通っていた小さな教会付属の幼稚園と決めることに迷いはありませんでした。

んと私の二人のために、週一回の聖書の学びと家庭集会を開いてくださいました。そして私は「この方(バプテスマのヨハネ)は水のバプテスマで、この方(イエスさま)は水と聖霊によるバプテスマとはどういう意味ですか」「アーメンとはどういう意味ですか」などの質問をしていました。聖書は私のことが書いてあると驚きました。

「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言うた人がいるのです。この方がキリストなのでしょうか。」

(ヨハネ 4:29)

口にはいる物はみな、腹にはいり、かわやに捨てられることを知らないのですか。

しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。

(マタイ 15:17-18)

た。それは「教会には何かがある。私の持っていない何かがありそう」という漠然とした思いからでした。幼稚園では、毎月父母会があり、その中で牧師から十五分程度の聖書のお話がありました。初めて世界のベストセラー、聖書を手にした感触は今でも覚えています。何回目かの父母会での聖書のお話は、サマリヤの女の箇所でした。深い意味は分かりませんでしたが、イエスさまが私に語ってくださいているように思えました。

しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」女はイエスに言った。「先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

(ヨハネ 4:14-15)

また同時に、教会員の方のお宅で、幼稚園のお母さ

受洗へ、裁判のこと

愛のない私は自分の思い、考えで物事を判断し、娘が私の思うようにならないと、イライラし感情的に腹を立てる者です。罪のこと、救いのこと、十字架のこととは分かりませんでした。聖書には私のことが書いてあること。また娘よりもまず私がイエスさまを必要としていることを知らされました。まさにこのことは晴天の霹靂(へいきり)でした。私は人を傷つけ、裁き、大切な方たちをイエスさまから遠ざけてしまうものです。不品行、憤り、欲深いこと、ねたみ、虚栄心等、様々に悪い考えが起きます。私の罪のために十字架におかかりになられたイエスさまのご愛を感謝します。十字架のイエスさまを覚えて、悔い改めて生きていくことができますように。一九八三年五月、教会で受洗に導かれました。三十六歳でした。このことは私たちにこれから起こることの前に、イエスさまが予めご用意してくださった恵みであることを、後年知ることになります。

子育てと平行して心を暗くすることが起こりました。それは夫の仕事が不景気でうまくいけなくなり、それまでの「平穩無事が何より」というところから、この先どうなるのだろうという見えない不安で囲まれるようになったことでした。

ある日、気の毒そうな表情をした郵便配達員から、一通の封筒を手渡されました。配達証明書付きのもので裁判所からのものでした。仕事仲間のトラブルに巻き込まれて、大きな負債を負うことになりました。夫は裁判を起こし、裁判は三年半ほど続きました。

苦しくてお祈りできない私でしたが、その間イエスさまは私の近くにいつもいて下さいました。私の知らないところでの教会の皆さんのお祈りと実際のな援助、励ましを頂きました。確かに主はみことばどおり、私たちに恥をかかせることはなさいませんでした。苦しみの中、イエスさまは無神論者の夫を少しずつ変えていって下さり、教会のクリスマス、元旦礼拝、時折、日

曜礼拝にも加えて下さいました。

裁判は敗訴に終わりました。夫の留守中に判決後の手続きをする方が来られました。娘が六年生の一学期を終え、夏休みを迎える前でした。二学期はそこから小学校に通えるように新しい家を探している頃でした。裁判所の方は穏やかで紳士的な初老の方でした。私はその方のふるまいや話し方に心を落ち着かせて応対することが出来ました。「イエスさま、良い方をこのような状況の中で送って下さりありがとうございます」その方と話す間、娘は近所のクリスマスチャンホームの子供たちのところで遊ばせました。裁判のこと、法律のことは何も知らない私は、裁判所の方に、敗訴になってしまったけれどまだ話し合いの余地が残されているかどうか尋ねると、「話し合いは出来ます。大いにやってください」という、願ってもない言葉が返ってきました。

こうした結果、負債は残りましたが家を出ることに

キリスト集会へ

私はそれまで、属している教会が他の教会よりも素晴らしい教会で良かったと思っていました。しかし、鈍かった私も、愛あふれる大好きな聖い主イエスさまの教会が、変わってしまったことに気がつくことになりました。悩みの中、やっとの思いで第一回目の春日部キリスト集会の玄関にたどり着きました。ベックさんのメッセージが終わって、涙ながらに目にしたものは、身動きできないほどの大勢の人々を覆っている、輝くばかりの光と平安でした。その後、集会の若い方やベックさんとお話した時の私の第一声は「ベック先生……」でした。それに対して、ベックさんは「先生ではないよ。ベックさんでいいよ」と言われました。

夫のこと

夫の仕事はハードで、私の目にも過労死寸前ではないかと思えるようになってきました。医師からは、ス

はならずには済みました。イエスさまは私が試練に出会い、行きづまっても倒れないように予め聖書をお与え下さり、教会の皆さんをお与えくださって目に見えること、見えないことと、沢山の恵みを用意して下さいました。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。
(哀歌 3:22-24)

苦しみに会ったことは、私にとつてしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

(詩篇 119:71)

トレスと切り離すことが必要と助言され、夫は退職に至りました。一年ほど、体を休めた頃、元職場の上司から香港での仕事の誘いがありました。私は反対しましたが、夫は復職を選びました。話は前後しますが、このころ私はまだ、前の教会に籍を置いていました。夫は赴任先の香港で教会を捜してみたそうです。一方、夫が香港に赴任中、私はその教会を離れて、キリスト集会に導かれておりました。

夫は香港で二年間勤務した後、タイのバンコクに職場が移りました。その結果、主のあわれにみにより、バンコク集会に導かれ、集会の皆さんの沢山のお祈りとお付き合いに支えられ、礼拝に加えられました。

バンコク集会は小さい集会でしたが、集会の皆さんの熱い信仰とお祈りを通して、年二回の喜びの集いが開かれていました。言葉の違いや息苦しい日々の生活に加えて単身赴任中であつた夫にとって、集会の皆さんのお付き合ひには沢山の力を頂いたことでしょう。

言葉に尽くせない感謝で一杯です。

二〇〇一年、年末年始の休暇で帰国した時、玄関に立っていた夫の姿には驚きました。夫には似つかわしくない、バンコクの空港で良く売られている透明の箱の中に入っているランの花で、特大の箱を、しかも四箱も抱えて立っていたからです。夫は、二〇〇一年のバンコク喜びの集いで、ホテルの大きなプールでベックさんより受洗の恵みに導かれました。私は今まで抱えていた、生きることや破滅への不安から解かれたことへの感謝と共に、安堵しました。夫婦一体となるとはこのことを言われているのかと、味わい知る恵みも頂きました。

「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。
(使徒 16・30〜31)

あなたがたが先祖から伝わったむなし生き方から贖^{あがな}い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血よつたのです。キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。

(1ペテロ 1 18〜19)

娘のこと

イエスさまが大好きな娘は、教会の日曜学校に喜んで自転車に通っていました。春休みの中学生教会キャンプが終わって、玄関に入るやいなや、「私受洗したい」と涙ながらに言いましたが、受洗には至りませんでした。イエスさまに愛されていることと感謝を忘れずに、はつきりと霊の目が開かれ、従う者となりますように祈っています。

だから、神の国とその義とを、まず第に求めなさい。

そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。
(マタイ 6・33)

母のこと

私が母に受洗することを話した中で、お焼^{しょうこう}香はできなくなることも話しました。母から「信じられる人は良いね」と思いがけないことが返ってきました。私の家は私が小学校まで大田区蒲田に住み、お隣の家は駄菓子屋^{だがしや}さんでしたが、その家はクリスチャン家庭だったそうです。学校が終わると五円玉、十円玉を握りしめて駄菓子を買に行っていました。とても優しいおばさんという印象で、その方の声や表情を今でも思い出します。母が言うにはそのお宅からは、賛美歌が聞こえてきたそうです。イエスさまは、母にそこのご家庭の人となりや、賛美を通してクリスチャンに對する思いや考えを良くして下さったように思います。キリスト集会に移って間もなくのこと、ある日、集

会が終わりがけた頃にある方から、母のところへ集会のメッセンジャーの方にお話しに行つて頂いたらと勧められました。その方は、突然の申し出にもかかわらず、心よく母の所へ訪ねて下さいました。そこへ近所に住む母の姉が偶然訪ねてきて同席し、福音を初めて聞くことになりました。その後、母は上石神井の集会へ導かれました。上石神井集会へは吉祥寺キリスト集会の方の車に乗せて頂き、また同居している義姉も運んでもらったこともありました。初めての集会の時、隣り合わせになった若い人に「えらいわねー。こういう所にきて」と嬉しそくに話しかけていました。祈りとみことばと賛美に心安らいた時を頂いたようにでした。集会に出席できたのは合わせて三回と少なかったのですが、その後、体の弱い母には出席が難しくなりました。それでも私の姉は、母が愚痴を言わなくなつたと母の変化に気が付いたようでした。毎朝、毎晩、仏壇に向かつて何やらお経のようなものを唱えて最後に

姉のこと

姉は最晩年になり病の中、神さまの不思議なお導きで、同じ横浜に住んでおられる集会の方とお会いしてお話を聞く機会が与えられました。その方は、イエスさまの福音を伝えて下さるため、入院先の病院に会いに来て下さいました。姉と同年ということもあり、その日が初めてとは思えない、心のうちとけた時を過ぎさせて頂きました。当日は迷路にふさがれたようでお会えるかしらと心配しましたが、主は最善の時と場所へと導いて下さいました。「愛するイエスさま私のわがままのために…」(※)と共に祈つて下さいました。姉はかつて、春日部の我が家に遊びに来て、トイレの壁に貼つてあるこのお祈りを見て「罪と言つてもねー」と言つておりました。主は、姉が自分の病気の苦痛、夫の心配、子供たちへの溢れる思いの中、横浜の集会の方とお話をする時を祝福して下さいました。その後、三週間ほどで天に召されました。「まだまだ若くて元

「イエスさまアーメン」と言っていました。「イエスさまごめんなさい」「私の罪を赦してくださいあってありがとうございます」「イエスさまこれからよろしくお願いします」と一緒に祈りました。

八十歳を過ぎた母は池袋の病院に入院し、それから五十日ほど召されました。入院中一度、お忙しい中ベックさんが立ち寄つて下さいました。また、集会のある方が、「生きるのは大変ですね。」と母が言っていたと、後日私に話して下さいました。長い間、母の救いのために祈りと共に関わつて下さった集会の皆さんに感謝いたします。母は、叔父、叔母の葬儀や父の法事の折には、私がクリスチャンであることを話し、お焼香が出来ないことを話してくれていたそうです。母のたましいのゆくえをイエスさまにおゆだねしました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
(イザヤ 43・4)

気なのに、イエスさま何故ですか」との思いでしたが「病気では死なないよ。御国でご利用があるからだよ」とベックさんが話されたことを思い返しました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによつて主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

(イザヤ 63・9)

信仰を頂く前、私は「イエスさまを十字架につける」と叫んでいた者でした。救われた後も、悪いものから守られますようにと偶像礼拝やご利益宗教に心がゆれる者です。イエスさまが私の罪の身代わりに血を流して死んで下さったということを知らず、分からず、自己愛のゆえに、自分の正しさを主張する愛のない者でした。このような私にも、主イエスさまの十字架の愛は、私のたましいを滅びと破綻から解放して下さいま

した。

ベックさんは「問題が問題ではないよ」と言われました。問題の解決は大切ですが、人として最も大切な、真の神様（イエスさま）への佐久間敬子個人のあり方を正すと言うご目的があるのを知りました。生きるためのパンと水を望み、失敗しない人生の知恵をいただけるのではないかと、娘を教会幼稚園に入園させました。けれどもイエスさまが私に語られたのは「わたしをあなたの心の中に入れて」と言うことでした。イエスさまなしで生きることの罪を教えられました。

「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」イエスは、これらのことをお話しになると、立ち

去つて、彼らから身を隠された。（ヨハネ 12:35〜36）

人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということをも、あなたにわたらせるためであつた。（申命記 8:3）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ 5:16〜18）

佐久間敬子（さくまけいこ）

東京都大田区生まれ、東京都立鷺宮^{さぎみや}高校卒、日本共同証券^株

夫 邦雄
長女 厚美

（※）祈り

愛する主イエス様

私のわがままのために、代わりに罰せられ死なれたことを感謝いたします。

あなたの流された血によって、すべてのあやまちが赦^{ゆる}され忘れられていることも感謝いたします。

あなたを信じますから、死んでさばかれることがないことも感謝いたします。

あなたを信ずる者は、死んでも生きると約束されていることも感謝いたします。

死ぬことは終わりではありません。

あなたと一緒にいることです。

私の国籍は天にありますから感謝いたします。

今からのことすべて、あなたにおまかせいたします。

あなたの御名によってお祈りいたします。

アーメン。



よみがえりと光

広田 慈宏



奥様の佑理子さんと

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5:16～18)

神様との出会い

一九九四年に私の母親がキリスト集会に導かれました。しかし、私はイエス様という神様がいることを知っただけで、私にはまったく関係のないことだと思っていました。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」
(使徒 16:31)

親に連れられて堺キリスト集会に行っていました。集会に来ている同年代の友人に会えるのが楽しみなだけで、全くみことばは心に入ってきませんでした。そ

の後、高校、大学に進み、アルバイト、バスケットボールクラブと人生を楽しんでいました。目立ちたがり屋な性格でしたので、小学校、中学校はバスケットボール部のキャプテン、中学校は生徒会長、大学はバスケットボールサークルを作り、特に大きな問題もなくそれなりに人生を楽しんでいたのです。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」
(ヨハネ 11:25～26)

そんな大学四年生の十月、体育の日の代休に、朝から原付バイクに乗ってアルバイトに出かけました。今もですが、自己主張が強かった私は、朝、出かける前、親と喧嘩をしてアルバイトに飛び出しました。途中、私は信号無視をして交通事故を起こしてしまいました。

後で聞いた話によると、その場ですぐに救急車で病院に運ばれ、十日間意識不明でした。結局、その日から年末まで入院することになりました。

イエスは答えて言われた。「まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」
(ヨハネ 3:3)

苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことを守ります。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

(詩篇 119:67、71～72)

生まれ変わり

医師の診断は脳挫傷のうざしやうによる高次脳機能障害でした。

6人の証し

Unser Herr lebt

私の人生が大きく変わりました。

大学院に合格していたのですが、二か月半の入院のために大学院の合格は取り消しとなりました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎^{とが}が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくだらないようにしたのだ。

(イザヤ 59・1～2)

キリストが現われたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちを歩みません。罪のうちを歩む者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。

(1ヨハネ 3・5～6)

『主は生きておられる』や『光よあれ』など集会から出されている書物を読んだり、何度もベック兄弟のメッセージテープを聞いていました。

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。

神は光であつて、神のうちに暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると云っているなら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであつて、真理を行なつてはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめ

一年留年し、翌年に再度、大学院試験にチャレンジしましたが、結果は不合格でした。大学院試験の結果が九月末にわかりましたので、さらにもう一年、留年することになりました。

それまで、自分ではそれなりにうまくいつていたつもりでしたが、全く何もできない者であることがわかりました。しかし、これこそがイエス様が高ぶる私にくださった大きなプレゼントでした。

しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」ですから、神に従いなさい。

(ヤコブ 4・6～7)

事故を起こしてイエス様が大好きになりました。集會に行ったり、みことばを聞いたり、集會の兄弟姉妹とお交わりすることがほんとうに楽しくなりました。』

ます。

(1ヨハネ 1・3～7)

すなわち、神は私たちを世界の基^{もと}の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとなされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによつてご自分の子にしようと、愛をもつてあらかじめ定めておられたのです。

(エペソ 1・4～5)

さて、イエスにさわっていたかこうとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかつた。イエスはそれをご覧になり、憤^{いきどお}つて、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」そしてイエスは子ど

もたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

(マルコ 10:13-16)

結局、大学四年生で三年間をすごしました。事故を起こす前に卒業論文以外の単位はすべて取得していたので、大学の授業は受けないで研究室で卒業論文のための研究をしました。しばらくの間は一人で家から大学へ通うことができなかったので、母親に車で送り迎えをしてもらいました。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」

(ヨハネ 14:6-7)

ないでしょうか。

(出エジプト 33:16)

あなたの道を主にゆだねよ。主に信賴せよ。主が成し遂げてくださる。主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

(詩篇 37:5-6、23-24)

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

(2コリント 12:9-10)

大学四年生だったので就職活動を始めました。就職先も主が備えてくださっているのに、そのお方に頼らず、自分の思いで就職活動も頑張っていました。自分に負い目があったので、自由応募でいろいろな会社の説明会に参加しました。履歴書に事故をしたことも書きました。何社かのリクルートの方から残るように言われ、事故の事を聞かれました。どの会社も不採用でした。

そんな時、研究室の教授から、研究室だけに推薦が来た会社があるで、その会社に応募してみないかと話がありました。就職が決まらずに焦^{あせ}っていたので、本当に主の恵みでした。

私とあなたの民とが、あなたのお心になつていいることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのでは

相変わらず、自分中心に歩み、自分の都合のいい時だけ神様に頼るような不信仰な者ですが、こんな私をイエス様が全き愛を持って愛してくださっていることにほんとうに感謝です。

そのうちに主が来られ、そばに立つて、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。

(1サムエル 3:10)

オートマチックトランスミッションやハイブリッドシステムを作っている自動車部品メーカーに就職しました。事故を起こした時から五年間はけいれんを起こす可能性があるので、毎食ごとにけいれんを抑える薬を飲んでいました。会社の友人に事故の話をしました。

あかりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下

に置いたりする者はありません。燭台しやくたいの上に置きます。はいつて来る人々に、その光が見えるためです。隠されているもので、あらわにならぬものはなく、秘密にされているもので、知られず、また現われないものはありません。だから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取り上げられるからです。

(ルカ 8・16、18)

二〇〇五年四月に就職してから一か月後に、新入社員の実習が二か月間ありました。工場内の部品搬送車の担当を言い渡されたのですが、工場内とは言っても搬送車の運転が必要でしたので、事故のためには運転ができないと上司に告げました。結局、ライン内で部品組み立ての仕事をしました。むなしい思いでしたが、主が共におられるという平安がありました。

生まれ変わってからの歩み

イエス様はそれぞれの人の歩みの中で、その時その時にイエス様を宣べ伝える時も備えてくださっていると思います。私は、職場の中でイエス様を証しする機会が与えられています。

それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。…そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもつて、みことばを確かなものとされた。

(マルコ 16・15、20)

私の職場の三人の方にイエス様のことを伝えました。同じ寮にいた十歳ほど年下の後輩に『主は生きておられる』(第四号)を渡すことができました。(この冊子の中で「各地の集会から」で大阪集会が紹介されてい

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(2コリント 3・18)

イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

(ルカ 9・23)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

なのですが、その写真を撮影した次の日に、交通事故を起こしました。(一緒に名古屋集会にも集いましたが、その後輩から、「確かに本当の神様がおられることはわかりました。ただ、今の自分には必要ありませんので、もし困ったことがあった時に連絡します」と丁寧に断られました。今もその後輩が主に導かれるように祈っております。

この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

(マタイ 24・14)

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。…愛するのに時があり、憎むのに時がある。戦うのに時があり、和睦わづらするのに時がある。

働く者は労苦して何の益を得よう。私は神が人の子らに与えて労苦させる仕事を見た。神のなさることは、すべて時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。：私は知った。神のなさることはみな永遠に変わらないことを。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。：神は、すでに追い求められたことをこれからも捜し求められる。

(伝道者 3・1〜2、8〜11、14、15)

職場の先輩のメカニックの工長にもイエス様をお証しする機会が与えられました。スタッフとメカニックでは働く場所が違いますが、先輩がわざわざ私の働く建屋に來られて一緒に昼食をしたり、プライベートでも釣りに行ったり、夕食を共にすることもあります。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によつて自分を変えなさい。(ローマ 12・2)

人間関係で悩まれている方もたくさんいると思います。もう一人の先輩は上司と折り合いが悪く部署を移されました。「主は生きておられる」や、そのほかの集会から出されている書物を数回お渡しました。いつもそれらを読まれますが、「そういう人生の人もあるんだな。俺は俺の人生だから…」と言われます。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあつて、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。：そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。(エペソ 5・8、10)

イエス様の恵みは私たちの思いをはるかに大きく超えていると思います。家族のことや、親、子供のこと、会社のことや近所のことなど、集会に集われている方々、みんなそれぞれの歩みを通して集会に導かれ、主を賛美できることはほんとうに感謝です。

らキリストにある死者が、まず初めによりみがえり、次に生き残っている私たちが、たちまち彼らとつしよに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会ふのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(1テサロニケ 4・16〜17)

いつも主にあつて喜ばなさい。もう一度言います。喜ばなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。何も思い煩わ^{わづら}ないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによつて、あなたがたの願い事を神に知つていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守つてくれます。(ピリピ 4・4〜7)

広田 慈宏 (ひろた よしひろ)
八尾市立中高安小学校、高安中学校、明星高校、大阪府立大学工学部電気電子システム工学科卒、アイシン・エイ・ダブリュ株式会社勤務
妻 祐理子 (ゆりこ)

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて來られます。それが

暗闇に光を当ててくださる主

広田 祐理子



ご主人の慈宏さんと

キリスト集會に導かれるまで

私は一九八四年、愛知県常滑市とこなめに両親の一人娘として生まれ育ちました。子どもの頃から人づきあいはあまり得意ではありませんでしたが、学校生活はそれなりに楽しく、家の都合で少々寂しい思いをしたこと以外は大きな問題もなくのんびりと育ちました。

イエス様のことは、歴史上の人物という以外は知りませんでした。しかし、中学時代の日記を読み返すと、美しい自然を造られたのは神様だと、なんとなく感じていたようです。家から歩いて十五分ほどの地元の県立高校に進学し、大学は英語が好きだったことと先生の勧めすすめ、名古屋市内の私立に決めました。私にとっては難しい学校でしたが、世界史の先生が放課後職員室で個人的に受験対策をしてくださいました。そのおかげで合格することができました。

入学すると慣れない電車通学与学科の課題をこなすのがたいへんでした。やっと慣れた頃夏休みに入り、

勉強などすっかり忘れて遊び呆ほうけていました。後期が始まると、すっかり前期で身に着けたことを忘れてしまっていて、授業についていけなくなり非常に焦あせりました。クラスメートたちは休み中も英会話に通うなど、しっかり勉強が続けていた様子でした。課題の提出期限にも間に合わせる事ができなくなり、遅刻も増えてしまいました。先生から、「あなたに必要なのは自信だよ。自信を持つて」と言われましたが、いったい自信って何だろう？ どうしたら自信が持てるのだろう？とわからなくなりました。初めて自分に自信がないことを意識しました。その頃から何をやっても「これでいいのだろうか？」と、不安や恐れがいつもあり、対人関係でもどうやって人と接したらいいかわからず、苦しい心の状態でした。このままではいけない、と思い、親に頼んで英会話学校に通わせてもらいました。そこでキリスト集會の姉妹に出会いました。

学生の頃は自分に自信を持ちたい、自分を変えたい、人づきあいが苦手なことを克服したいという思いから、一生懸命にいろいろなことをしていました。充実感はありませんでしたが、どうあがいても自分に自信が持てず、自分の思い通りにいかないことが悔しく、優秀で余裕があるように見えた学友と自分を比べて落ち込み、苦しくなりました。

米国留学中に、夜、友人と寮のロビーで勉強していた時、私は部屋に忘れ物を取りに行きました。すぐロビーに戻るつもりが、疲れていたのでふとベッドに横たわりたくなり、そのまま眠ってしまいました。友人は私が戻らないのを見かねて、私が置きっぱなしにしたノートパソコンやテキストを自分の部屋に持って行って預かってくれ、「預かっているから取りに来てね」とのメモを私の部屋に滑り込ませておいてくれました。私を責めることもせず、当然のようにそうしてくれました。部屋で気がついたら朝になっていまし

6人の証し

Unser Herr lebt

た。私はどのくらい彼女をロビーで待たせ、迷惑をかけてしまったのだろうと、自分が情けなく、同時に彼女の優しさに心が打たれました。私が逆の立場だったら、きつと迷惑をかけられたと腹を立て相手を責めるだろうと思いました。彼女は私にも他の人にもいつも親切な優しい態度で接し、周りからも当然信頼され愛されていました。私自身も彼女のことは大好きでした。彼女みたいに優しい思いやりのある人間になりたい、そして人から好かれたいと心底思いましたが、どう頑張ってもなれませんでした。そのような自分が情けなく大嫌いでした。また自分がないものを持っている彼女を羨ましく思いました。

留学を終えて帰国後、英会話学校で一緒だったキリスト教会の姉妹に会った時、彼女はご自身がキリスト者であることを熱く話してくださいました。最初は宗教かな？ どうせ頼るならユダヤ人の神様より日本の神様が良い、などと思いましたが、姉妹の話は不思議

ととても印象に残り、こんな世界もあるのかと思いました。祈りが聞かれたことや、聖書のことばに従って祝福されたことも話してくださいました。特に姉妹が「自分の好きなことより何より神様が大切」「イエス様を信じれば実を結ぶ生活ができるようになる」と言われたことが心に残りました。名古屋キリスト教会の日曜礼拝に誘われるままに何度か連れて行ってもらいましたが、その時はよくわかりませんでした。メッセンジャーで来ておられた和田芳明さんから「愛する主イエス様、私のわがままのために、代わりに罰せられ死なれたことを感謝いたします」から始まるお祈りのカードをいただいて、和田さんの後についてお祈りをする時も与えられました。その後もそのお祈りのカードを時々読んでいました。不思議な平安を感じました。しかし、学生の時は世間の厳しさも知らずに、自分の罪もよくわからず、神様は必要ない、自分の力で生きていけると思っていました。

就職活動の頃になると、自己分析して自己PRや自分の長所について一生懸命考えましたが、考えれば考えるほど、自分のいいところは見つかりませんでした。自分のしてきたことを思い返すと恥ずかしさしかないと思いました。

なんとか内定した仕事は将来営業職になることを前提にした営業事務でした。営業職について、たくさん人と接触する経験ができれば、人づきあいが苦手な自分を変えられるのではないかと浅はかにも期待していました。しかし、入社してすぐに会社では学生の頃とは違い、自分と気の合う人以外ともコミュニケーションを取らなければならないが、それが全く向いておらず無理であるとはつきりわかりました。ちょうど辞める人がいた経理にあつさり異動となりました。社員数二十数名の会社で、営業事務と営業は得意先や納期に合わせて、その他の部門も営業部に気を遣^{つか}ってほとんど全員がサービス残業していたにもかかわらず、私は

仕事が終わると家が遠いことを理由に毎日定時でさつさと一人だけ帰っていました。だんだんと後ろめたい気持ちになり、同僚に悪いと思いながらも、いつも早く帰りたい気持ちの方が勝って、同僚に声をかけて気遣うとか、自分の時間を削って手伝うとか、付き合いで残ることはできませんでした。愛と思いやりのある良い人間になりたいのに、どうしても他人のために自分を犠牲にはできないことでとても苦しくなりました。またこの先どう生きていけばいいのかわからず、将来のことも漠然と不安でした。自分は頼りにならないので、他に頼れるものが欲しいと思いました。人はいつか死んでしまうこと、身近にいた強く見えた人の弱い面を見せられていたので、人には頼れないと思いました。運の良い人生を送りたいとも思いましたが、物事は何も自分の思い通りになりませんでした。その頃までに、苦しい時にはイエス様に「助けてください」と祈るようになっていました。

その時の思いをアメリカに行った姉妹にメールすると、苦しいのは神様の光が私の心に当たったためであること、人間はみんな罪人であること、自分で自分を聖くすることはできないが、イエス様は雪のように白く聖めてくださること、今はただイエス様にすがって生きていけばいいこと、イエス様はすべてをご存じで私の考えを越えて最善をなしてくださるお方であることなど、イエス様に解決があることをメールの返事に書いてきてくださいました。私もイエス様にすがって生きたい、この方に頼りたいと心から思いました。また、そのメールには、自分ではなく神様のために時間を使うこと、イエス様の御名によって集うことが大事、なぜならそこにはイエス様ご自身がいらっしゃるから、祈って時間がある時は集いに集い続けてみてください、とも書かれてありました。イエス様ご自身のおられる集会に私も行きたい、行ってみようと思いました。

二〇〇八年三月から名古屋キリスト集会に集うよう

り感謝しています。主は私たち二人を守り導いてくださいました。自分の思いや感情は当てにならないこと、みどころかどうかが一番大切だということを主は教えてくださいました。二〇一二年三月、主は結婚へと導いてくださいました。

受洗の恵み

話は前後しますが、集会に集うようになって、バイブル・キャンプ（喜びの集い）で洗礼を受けられる兄弟姉妹を見て、私も洗礼を受けたいと思うようになりました。当時結婚を祈っており、「両親への証しとなるために、洗礼を結婚前に受けることが大切」というアドバイスも頂き、二〇一〇年二月の「名古屋喜びの集い」で受洗の恵みにあずかりました。受洗することを母に伝えると、「今じゃなくても、もうすぐ死ぬってわかった時に受ければいいじゃん」と言われました。父も賛成の様子ではありませんでしたが、何も言わな

になりました。集会を通して少しずつみことばに触れる機会や兄弟姉妹方とのお交わりが与えられました。兄弟姉妹には集会に導かれる前も、後もお祈りに覚えていただき、感謝しております。

結婚

初めて一人で集会に行った時、十時半からのところを、十時と勘違いしていました。九時四十五分くらいに礼拝場所に着き、誰もおらずにがっかりして帰ろうと思ったその時、将来夫となる慈宏さん（よしひろ）が一番に来られました。自分の苦しい思いを話すと「そういう人イエス様は大好きだと思うよ」と言われました。この出会いがなければ慈宏さんは私に気がつかなかったと言うので、ほんとうに主は不思議です。数か月後、交際が始まりましたが、私は結婚願望が強く、感情的、盲目的で周りを心配させてしまいました。結婚のを通して、でも、たくさん兄弟姉妹がお交わり、お祈りくださ

かったと記憶しております。両親に従ってこなかった者で、後でやっぱり親のいうことは正しかった、自分は愚かだったと後悔したこともたくさんありましたので、両親がその様な反応をしたことは気にかかりました。ふと聖書を開くと、

別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤（す）につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」（ルカ 9:61、62）

とあり、私のことのようにだと思いました。受洗当日、ベック兄は私の心を察し「どうしたの？」と聞いてくださいました。親に言われたことを話すと「もう大人だから、自分のことは自分で決めればいいよ。両親には愛し、尊敬しています、でも自分のことは自分で決

めます、と伝えればいいよ」と話してくださいさり安心して受洗にあずかりました。水から上がると『日々の歌』二一〇番「新しい道歩みだす」が歌われ、兄弟姉妹がほんとうに喜んで迎えてくださいました。

救いの確信

受洗後も受洗前と変わらず、救いの確信がありませんでした。これでいいのだろうか？　どうやったら喜べるのだろうか？と悩んでいました。

結婚後しばらくして、集会の姉妹が近所に引っ越して来られて、よくお交わりしてくださいました。その方がいつもお元気で明るいので、「姉妹はいつもお元気ですね」と言う。「信仰持っていなかったら、こんな風じゃないよ」との答えが返ってきました。姉妹がお仕事に行かれる前に、聖書のみことが綴られた冊子『日々の光』を読んでお祈りしてから行くと聞いて、私もやってみようと思いました。聖書も何度も通読して

いると聞いて、私は時間があっても日曜日とたまに気が向いた時しか開いてなかったので、びっくりしました。聖書は分厚いし字も細かいし、こんなに読めないと思っていました。ちょうど慈宏さんが「福岡喜びの集い」に行った時、ヴィルヘルム・ブッシュさんのメッセージ「神と共に歩む人生」の朗読CDを買ってきてくれました。活字を読むことから遠ざかっていましたが、CDなら聞いてみようと思い、家でアイロンがけをしながら聞いていました。その中で「イエス様は私に自分の心にあることを話すのを待っていてくださること、イエス様のお答えを聞くつもりで聖書を読むこと」を勧められ、一日十五分からでもいいとありましたので、それなら私にもできそうだと思えて、そうしました。すると主はみことばを通して私の罪がイエス様の十字架上で流された血潮によって、ただ主の恵みによって、完全に赦されたことを疑いようがないほど、何度も、繰り返し、はつきりと示してくださいました。

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

(エペソ 1・7)

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようにになる。」

(イザヤ 1・18)

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

(詩篇 103・12)

信仰の根拠は自分の感情とか思いではなくて、みことばにあるのだと初めて知りました。それ以来イエス様にお話しして聖書を開くのは喜びへと変わりました。主はどのような素晴らしい恵みを与えてくださったのか、イエス様がどのようなあわれみ深いお方であるか

もだんだんと知るようになりました。ある時、家庭集會で『日々の歌』一三六番を賛美している時、「しばしの時も絶えることなし、やさしく見つめる主イエスのまなざし」と歌った瞬間、「イエス様は私をずっと見ていてくださったのに、主を見上げていないのは自分の方だったのだ」と、光が当てられました。

アルバイトに行く時や、日々の生活にも、みことばから力や知恵をいただくようになりました。

結婚生活

結婚したら子供が与えられるのは自然なことであると考えていましたので、子供が与えられないことは悩みでした。自分の罪のせいだろうか、神様に祝福されていないのだろうか、と思ってしまいました。このことはどうにも手の打ちようがない、自分の思い通りにならない辛いことでした。夫はこのことについて「アブラハムとサラは百歳と九十歳でイサクを与えられ

た」と言いました。当時は現実的に考え、そんな年で子供を産むのは無理だろう、いったい何を言っているのか、問題から逃げている、と批判してしまいました。しかし主は、いのちのことは主の御手の中にあることを私に示されました。百歳と九十歳の夫婦に子供が与えられるなんて、ほんとうに信じられません。しかし、自分の思いではなく、主イエス様には何でもお出来になること、私を最善のご計画のうちに導いてくださることを信じるようにと主は導いてくださいました。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道より高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

(イザヤ 55:8-9)

夫に対する態度も様々なことを通して自分の罪を知

らされ、悔い改めへと導かれました。自分の考えが正しいかどうかよりも、主にあって夫の言うことを信じ、従うことが大切であり、それは主に喜ばれることであることであると示されました。夫に対する態度がそのまま私の主に対する態度なのだと示されています。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

(エペソ 5:22)

両親の救いについても、ベック兄に家族の救いは約束だから感謝しましょう、と教えていただきました。その時は信じる事が出来ませんでした、主がどのようなお方か知るにつれて、主は必ず約束を果たしてくださいと期待し、感謝して待つております。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

(使徒 16:31)

雨や雪が天から降つてもとに戻らず、必ず地を潤し、…そのように、わたしの口から出るわたしのことは、もむなく、わたしのところに帰つては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

(イザヤ 55:10-11)

このお証しの話をいただいて何を書けばよいかわかりました。あれこれと忙しくしていましたが、新型コロナウイルス流行のため出かけられなくなり、家で静まる恵みの時をいただきました。過去のキリスト集会の証し集「主は生きておられる」のメッセージやお証しを読み返す時となりました。その中で主のご栄光を第一に求めることが大切であると何度もありました。自分のことばかりに目を留めて自分の願ひばかりを祈つて主の御心を求めてこなかったことに気がつかされました。いつも一番大切な主の御名にご栄光が帰されることを祈るのを忘れていました。自分はダメだと

わかっていたつもりが、その頼りにならない自分にすがってしまふ者であるとも気づかされました。この証しを書くことを通しても主は私に光を当ててくださいました。主が私を通してご栄光を現わしてくださいと、祈っています。

また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(2コリント 5:15)

広田 祐理子 (ひろた ゆりこ)
常滑市立鬼崎南小学校、常滑市立鬼崎中学校、愛知県立常滑北高校 (現常滑高校) 卒、南山大学外国語学部卒

夫 慈宏 (よしひろ)

主に守られ、主に愛され、主と生 きるしあわせ

尾崎 従子



中央が従子さん、集会の皆さんと

大好きな祈り会——国立祈り会(ぶどうの会)のこと
「祈りは聞かれる。やがて時が来て、私の思いを遙かに超えて。主イエスの御心、すべてを動かす。その日を望んで、祈れる喜び。」

「日々の歌」一四五番、三番の歌詞

私は一九九二年に教会からキリスト集会に移って参りました。それから二十八年間、国立祈り会(ぶどうの会)に集わせて頂いています。

私は国立祈り会が大好きで、祈り会を通してたくさん
の恵みと祝福を頂いて参りました。

また、私達の祈り会は、国立谷保家庭集会と、セット
のような存在で、たくさんの方の恵みを頂いています。
その恵みのひとつは、祈り会に参加している皆さん
で、心をこめて、「愛のちらし寿司」を作らせて頂いて
いることです。それからもうひとつの恵みは、家庭集
会に来て下さる皆さんのこと、とりわけ、新しくキリ

スト集会に集われた、まだ信仰を持たれていない方達
のことを、お祈りさせて頂けることです。

私は、国立谷保家庭集会が大好きで、いつも喜び、楽
しんでいます。ちらし寿司の方はお陰様で、毎回、皆さ
まに喜んで頂き、感謝しています。家庭集会でのお台
所のご奉仕は本当に恵みです。この頃は国立祈り会の
人だけでなく、たくさんの方のご奉仕を頂けること
も、大きな恵みだと心から感謝しています。

祈り会に関して言えば、ここ二、三年のキリスト集
会のいろいろな出来事を通して、祈り会の人数が急激
に少なくなっていたのですが、そんな私達の祈り会に、
昨年(二〇一九年)には、五人の新たに参加される方々
を、主が与えて下さいました。この事も大きな恵みの
ひとつと、心から主に感謝しています。

私はこの祈り会を通して、「彼(イエス様)に信頼する
者は、失望させられることがない。」(ローマ10・11)という
聖書のことばの真実を、身をもって、いつも経験させ

て頂いています。たくさんの方の訓練も頂きました。そし
て、それはこれからも続くことでしょう。でも、主は
いつも私達と共に居て下さり、私達が正直にその事を、
主に祈りさえすれば、主はいつも恵みと祝福を用意し
て、待っていて下さるお方だということをこの祈り会
と国立谷保家庭集会を通して、知ることが出来ますか
ら、本当に感謝です。

幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道
に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。ま
ことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もその
おしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木
のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。そ
の人は、何をしても栄える。
(詩篇 1:1-3)

過去の私の歩み——年代順に

私は、一九四五年九月一日、第二次世界大戦の敗戦

の年に、家族の疎開先の、母の実家の山口県防府市で生まれました。

五人兄弟の四番目で福島家の三女でした。

父はまさに外地の戦場に飛び立とうとして、鹿児島県に駐屯^{ちゆうとん}していた軍隊に居たところで、敗戦になったと聞いています。父が軍隊から帰って来たので、疎開前まで住んで居た広島に、一家で移り住みました。広島^{おひし}の街は、当時、原爆で焼け野原の状態だったそうです。男^{おとこ}気の強い父は、それまでの勤めをやめて、広島^{おひし}の街を復興させるのだと、不動産の事業を始めました。そして、二年後の一九四七年八月六日に、私の弟が生まれました。

父の事業は成功し、おかげで私は広島で、中学、高校と、カトリックの女子校に通わせてもらいました。原爆投下後、たくさん^{たくさん}の宣教師達が、広島に遣^{つか}わされ、たくさん^{たくさん}の教会や学校が建てられ、広島は私学の盛んな地となっていました。家には、神棚と仏壇があるよう

な、ごく日本の普通の家でしたが、私は神様と言えばイエス様と自然に思うようになりました。この事は、私にとつては、本当に大きな恵みだったと思います。

教育をひとつの財産と思っていた父は、五人の子達を、皆、大学までいれてくれました。でも、私は、行き^いたかった東京の大学ではなく、地元^{じよん}の大学にしか行か^いせ^いてくれ^いな^いか^いった父に、大きな不満と反発心を抱いていました。傲慢^{ごうまん}、そのものでした。そして、結果的にその事は、父に逆らった結婚へと結びついて行きました。

主人とは大学で知り合いました。当時の大学は、二〇一九年の秋の香港の大学のように騒然としていました。父の反対を押し切って、大学を飛び出し、私達^{わたし}はそれぞれに夢を持って、二人して東京に出て来^いまし^いた。主人が二十二歳、私が二十三歳の時でした。もちろん、実家からの援助はあてに出来ず、若い二人の生活は、すぐに行き詰まり、二人は働かざるを得なくなり、夢は挫折しました。

その後、私達には年子で二人の子供達が与えられました。上は、女の子、下は男の子でした。

私が三十歳の時、生活のために、自宅で小さな英語教室を開きました。幼い子供達の世話をしに、主人の母が奈良から出て来て手伝ってくれました。大学入學と共に、イエス様を忘れ、傲慢にも父に逆らい、ひたすら自分中心に生きて来た未熟な私は、当然のことながら、苦勞人の主人の母とは、うまく行きませんでした。せっかく手伝ってくれているのに、早く、母が奈良に帰ってくれたら良いのにと、思うようになりました。主人に言っても、とりあってくれません。

当時の私は、他人と話した後、すぐに下痢をおこして、トイレにかけこんでいました。誰も信じられず、とても孤独でした。私は完全に、行き詰まってしまっていたのです。

そんな三十代半ばの頃、一人のアメリカ人の宣教師との出会いがありました。周囲とうまく行かない私に、

「狭い門からはいりなさい。」(マタイ7・13)との、聖書の言葉を下さいました。

三十九歳の時に、滴^{てれい}礼^{れい}でしたが、洗礼の恵みにあずかりました。心の中は、雲ひとつない青空で、本当に嬉しかったことを、よく覚えています。イエス様からの一方的なあわれみで、私の救いが成就した時でした。宣教師の方から、「わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません。」(ヨハネ14・6)という聖書のことばと、「あなたが選んだ道は、生命と愛の道です。」という宣教師の方の言葉が書かれた聖書を頂きました。今でも私の宝物です。

それから、私は、その宣教師の方の紹介で、小金井の小さな教会の会員となって、同じ位の年頃のイエス様を信じる皆さんと一緒に、楽しい教会生活を送っていました。救われてもお、私はうなじのこわい者でした。全く自己中心的な歩みをしていました。

イエス様の元に、罪の重荷をおろせた私は、周囲の

人達のことを、真剣にかえりみず、自分一人で軽やかに、信仰生活を楽しんでいました。

そんな自分中心な信仰生活を送っていた四十六歳の時、娘が突然、天に召されました。大学二年生で二十歳でした。娘は、私が昔、行きたかった大学に通う自慢の娘でした。努力すれば、何でもかなうと、何事にも一生懸命がんばる娘でした。また優しい娘でした。娘は私の支えでした。けれども、娘は、十九歳の時に、心の病にかかり、たった九か月の闘病生活の末に、入院先の病院で、突然に逝ってしまったのです。

神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすつかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。 (黙示録 21:3-4)

この聖書のことばと共に、娘のお葬儀を教会に集つ

いられる者になるためであること。

2. 自分や周囲の人々、現実起っていることに、目を留めないで、イエス様だけを見上げて歩み続けること。

3. 最終的には、イエス様に似た者に、造りかえて頂くこと、等々です。

次に思われることは、恵みと祝福はいつも試練とセットでやってくるということです。

この集会に移ってから、主人は、私が明るさを取り戻し、生き生きとよみがえったようになった様子を見て、一緒に礼拝に集ってくれるようになりました。私はホッとして、娘の死が無駄にならなかったことを、主に感謝しました。そして、一九九二年に長野県の御代田にある集会場で、主人と一緒に、今度は浸礼で、洗礼の恵みに与りました。

ところが試練がやってきました。五十代になるかな

ていた方々が協力して行って下さいました。

その後、半年ほど過ぎてから、私はキリスト集会に集っている方に誘われて、「天国の確信」と「自立した信仰」を求めて、キリスト集会に移りました。

それまで良くして下さった教会の人々に、別れを告げたのです。

教会からキリスト集会へ、二十八年間の歩み

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29:11)

キリスト集会に移って、私が一番強く思われることは、目標がはっきりしていることです。すなわち、

1. 救われたのは、自分のためではなく、主に用

らないかのうちに、洗礼後二、三年は一緒に集って来ていた主人が、集会を離れて行ってしまったのです。娘の死後、心が伏せていた主人は、元気になると再度、この世の事に関心が戻ってしまい、以前と同じように仕事をするようになりました。私には予想外の展開でした。ベックさんはやさしく私の手を握って、「ゆり子、世間にはよくあることだよ。でもあなたは集会に集って、イエス様を喜んでいなさい」と言ってく下さいました。

そして、他に生き方を知らない私は、そうすることにしました。

でも、抑えても抑えても、私の心の中の不満は消えず、主への賛美と同時に、主人への思いが、私の口をついて出てくるのです。

六十一歳の時、私はガンを発症しました。それこそが主の恵み、主からのプレゼントだったのです。そして、ガンという病が、祝福への源となったのです。

あたかも、イエス様は決心なさって、「今のままでは、この器は使いものにならない。一回こわして、作り直すことにしよう」とおっしゃられたかのようでした。

陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の氣に入ったほかの器に作り替えた。
(エレミヤ 18:4)

ガンという病名を聞いて、自分の死を意識した私は、天国で娘に会えるのは嬉しいけれどこのままの私では、イエス様に会わせる顔がないと思いました。深い悔い改めに導かれました。そして、主人にも、今まで悪い妻だったことを、謝ることができました。

主によって、新しく作り変えられた六十代の私は、主人のことは全て、イエス様におゆだねして、当時若くして召されたリンデさん（ベックさんの娘さんの一人）のように、「実を結ぶ命」になりたいと、ひたすら、

イエス様と自分との関係だけを追い求めるようになりました。

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。
(ガラテヤ 5:22-23)

ここで恵みについて、いくつか書かせて頂きます。五十代は、まっ暗だったと思っているのですが、主人への不満を、少しでもまぎらわせるためにと、五十三歳の時に、車の運転免許を取ることができ、練馬に住んでいた心が病んでいた姉の所に、一、二週間に一度、訪ねることができました。

このことがきっかけとなり、姉の主人、姉の息子、そして姉自身のそれぞれのお葬儀を、集会の皆さんに協力して頂き行う事ができました。主のご愛にあふれたお葬儀となり本当に感謝でした。それから、メサイアの歌のグループに入れて頂いたことは、私にとって大

きな恵みでした。主を賛美することの喜びと楽しさを教えて頂くことができました。

六十代の私は、主人に向けていた気持ちを、同居していた主人の母に向けて、年老いてきた母の役に立ちたいと思って、生活してきました。幸いにも、私のガンは初期でしたので、手術だけですみました。

母が八十歳になった時から同居していたのですが、母は九十七歳で召天いたしました。今から五年前のことです。亡くなる日の朝、母は、私に「ありがとう」と言ってくれました。天国がにぎやかになりました。天国で、娘と母に会えるのを楽しみにしています。

現在の私

私は二〇二〇年九月一日で、満七十五歳になりました。昨年の二〇一九年十月五日に起った我が家の出来事です。主人が出張先の岐阜県で、左足を骨折しました。二か月間、ギプスをはめていましたが、十一月末にギ

プスはとれました。かなりの重症だったとお医者さんから言われました。私は主人が骨折したと聞いた時から「いつもそうだったように、今度もきつと、主が、主人と私を守って下さる」と思いました。でも、「もし、何かこれ以上、悪いことが起つたら、それも主から受けとめよう。主は全てを益にして下さるお方なのだから」と思いました。

主人が骨折してから一週間後の十月十二日、その日は主人の誕生日でしたが、台風十九号が東京を直撃しました。多摩川のすぐそばにある我が家の近隣の人達は、皆、避難したようでしたが、主人が骨折していたので、私達は一步も動けませんでした。でも私の心は平安でした。夜の九時頃に、ひどかった雨、風は止み、翌日は朝からきれいな青空でした。主の守りを心から感謝しました。

主人が骨折したと聞いた時は、いよいよ主が主人に働いて下さって、今度こそ主人が主に立ち帰る時が

6人の証し

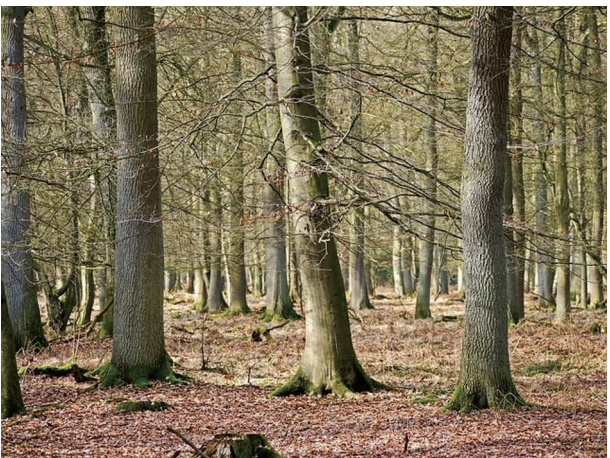
Unser Herr lebt

来たのだと、一瞬、ワクワクしましたが、どうも、それは私の計画のようでした。結論から言いますと、主人との関係は、見える所は、骨折前とちつとも変わりません。主人は相変わらず、仕事のことはかり、私は集会のことばかり考えて、暮らしています。でも、お互い年を取って、弱くなってきた相手を思いやる心が増してきたことだけは確かなようです。天国に行くまでの、つかの間の夫婦二人の平穏な日々を、主に心から感謝しています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16・31)

尾崎 従子（おざき ゆりこ）
一九四五年、山口県防府市生まれ、広島県広島市立
幟町のぼりちょう小学校卒、ノートルダム清心女子中学校、同高
校卒、広島大学文学部卒、現在、東京都府中市在住

夫 修司（しゅうじ）
息子 純（じゅん）



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によりこびをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

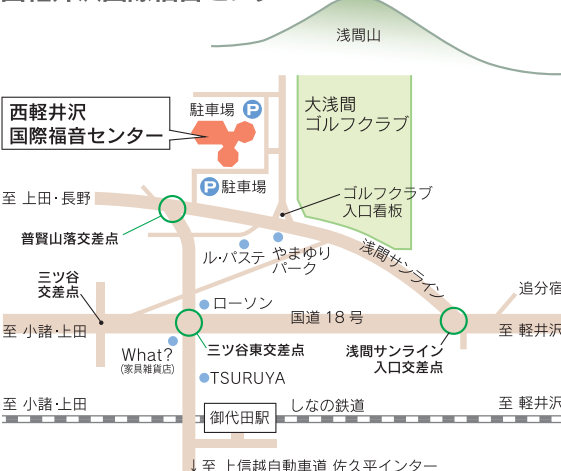
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターははじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



主は生きておられる 第55号

定価100円（税込み）2020年12月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力 芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

なお、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせいただけます。